令和元(2019)年度　文部科学省委託事業

日独学生
青年リーダー交流
事業報告書

独立行政法人　国立青少年教育振興機構

目　次

事業概要 …… 1

＜派遣事業報告＞

１．参加者名簿 …… 4

２．日　　程 …… 5

３．ダイジェスト …… 6

４．学習成果発表会 …… 12

５．参加者アンケート …… 18

６．個人レポート …… 19

７．成果と課題 …… 40

＜受入事業報告＞

１．参加者名簿 …… 44

２．日　　程 …… 45

３．ダイジェスト …… 46

４．学習成果発表会 …… 52

５．参加者コメント …… 54

６．成果と課題 …… 55

事業概要

１．事業趣旨

ボランティア活動を行っている日本とドイツの学生の交流を推進することで、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

２．実施関係機関

（１）主催

日　本：文部科学省

ドイツ：家庭・高齢者・女性・青少年省

（２）実施

日　本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

ドイツ：ベルリン日独センター

３．研修テーマ

若者の社会参画

４．参加人数

日　本：２１名、引率者２名

ドイツ：１５名、引率者１名

５．日程

（１）派遣

事前研修	７月２０日（土）～７月２１日（日）	２日間
合宿セミナー	８月２３日（金）～８月２５日（日）	３日間
派遣	９月１０日（火）～９月２４日（火）	１５日間

（２）受入

受入	８月２１日（水）～９月　３日（火）	１５日間

派 遣 事 業 報 告

１．参加者名簿

	氏　名	所　属　団　体	学　校　名
団長	山田　力也	西九州大学	
副団長	吉田　聡美	国立曽爾青少年自然の家	
1	浅山　莉奈	国立大洲青少年交流の家	松山東雲女子大学
2	稲本　聖菜	福岡県立大学社会貢献・ ボランティア支援センター	福岡県立大学
3	遠藤　沙弥	国立妙高青少年自然の家	新潟リハビリテーション大学
4	岡村　太郎	SDGｓプロジェクト in ラオス	立命館大学
5	小野　紗留	トムソーヤクラブ	鎌倉女子大学
6	加藤　清佳	新潟青陵大学ボランティア センター	新潟青陵大学
7	佐々木　翔	国立オリンピック記念青少年 総合センター	敬愛大学
8	白木　すみれ	学生防犯ボランティア アイリス	東海学院大学
9	武田　将次	NPO 法人ワーカーズコープ	島根県立大学
10	谷口　花梨	兵庫教育大学ボランティア ステーション	兵庫教育大学
11	田宮　佑菜	東金スポーツ推進委員会	獨協大学
12	永田　侑大	芦屋大学ボランティア部 Aqua	芦屋大学
13	中野　愛	名古屋大須ロータリークラブ	愛知淑徳高等学校
14	西部　十翔	学生国際協力団体 SIVIO 東海支部	中京大学
15	福原　稜太	高大連携キャリアサポート コンソーシアム	弘前大学
16	三村　美月	島根県立大学 BBS サークル	島根県立大学
17	森田　梨里佳	島根県立大学吹奏楽部	島根県立大学
18	山本　響希	国際交流支援団体 ICO	愛媛大学
19	吉岡　あずみ	学生団体 CAST'S	島根県立大学
20	義見　祐野	災害ボランティアサークル VS	都留文科大学
21	渡邊　夏海	日本遺産呉を外国人に PR するガイドになろう	呉工業高等専門学校

日独学生青年リーダー交流事業日本団

２．日程

月　日	滞在地	時間	プログラム
9 月 10 日 （火）	東京 ベルリン	午後	羽田空港発 ベルリン・テーゲル空港着
9 月 11 日 （水）	ベルリン	午前 午後	説明：ベルリン日独センター概要 講義:ドイツにおける青少年団体活動及び支援事業（青少年援助）概略 ワークショップ：参画とは
9 月 12 日 （木）	ベルリン	午前 午後	訪問：【U25】ベルリン（ベルリン大司教管区カリタス連盟 25 歳未満オンライン自殺予防相談） ベルリン市内歴史研修
9 月 13 日 （金）	ベルリン ラーヴェンスブリュック	午前 午後	自主研修 ラーヴェンスブリュックへ移動 合宿セミナー
9 月 14 日 （土）	ラーヴェンスブリュック	終日	合宿セミナー 見学:ラーヴェンスブリュック警告･追憶の場所(強制収容所跡) 全体会、班別ディスカッション、交流会
9 月 15 日 （日）	ラーヴェンスブリュック	午前 午後	合宿セミナー 班別ディスカッション、発表準備 全体会、ベルリンに移動
9 月 16 日 （月）	ベルリン ドレスデン	午前 午後	訪問：ドイツ自然保護連盟（NABU）青少年部（NAJU）ナーユー連邦事務局 ドレスデンに移動
9 月 17 日 （火）	ドレスデン	午前 午後	訪問：民主主義と勇気ネットワーク（ＮＤＣ）ドレスデン支部 ドレスデン旧市街見学、夕食会
9 月 18 日 （水）	ドレスデン	午前 午後	訪問：ドレスデン工科大学政治学研究所（政治教育における教授法） 訪問：ドレスデン市青少年消防団
9 月 19 日 （木）	ドレスデン	終日	訪問：青少年ハウス「マライケ」
9 月 20 日 （金）	ドレスデン	午前 午後	「若者の社会参画と青年リーダーの役割」：質疑応答・疑問点への回答 ホームステイ
9 月 21 日 （土）	ドレスデン	終日	ホームステイ
9 月 22 日 （日）	ドレスデン	午前 午後	ホームステイ 団ミーティング 学習成果発表会、歓送交流会
9 月 23 日 （月）	ドレスデン	午前 午後	空港に移動 ドレスデン空港発
9 月 24 日 （火）	東京	午前	羽田空港着

３．ダイジェスト

7 月 20 日～21 日　「事前研修」

○7 月 20 日（土）　事前研修

団員との初対面である。まず、主催者挨拶や日程紹介が行われた。次に、獨協大学名誉教授の黒田氏より、「ドイツを知る」をテーマに講義を受け、ドイツの教育システム等を大まかに学んだ。その後、過年度団員の体験談を聞き、最後にチームビルドプログラムを行い、ここではお互いをよく知るためのゲームや各自この事業における目標を定めた。これにより緊張が解け距離が縮まった。

○7 月 21 日（日）　事前研修

フライヤー用の写真撮影を済ませた後、青少年教育研究センター長である村上氏により、「日本における若者の社会参画」をテーマに講義を受け、日本のシステムについての理解を深めることができた。昼食後は団ミーティングがあり、係決めや事前課題について、話し合いを行った。

8 月 23 日～25 日　「合宿セミナー」

○8 月 23 日（金）　合宿セミナー

日本とドイツの顔合わせを行い、その後、日本における難民について「BOND」より講義を受けた。夜には夕食交流会があり、ドイツ団による出し物や個々の会話を大いに楽しんだ。

○8 月 24 日（土）　合宿セミナー

班ごとに分かれ、「日独のボランティアの共通点、相違点とその背景」、「日独の若者の政治参画の共通点、相違点とその背景」の２つのテーマについて、ディスカッションを行った。班は、日独メンバー混合で構成され、充実した研修となった。夜は班ごとに周辺散策を楽しんだ。

○8 月 25 日（日）　合宿セミナー

午前中は、発表会に向けて班別ディスカッションを行い、午後から合宿セミナーの学習成果発表会を行った。各班、発表内容には特色があり、とても聞きがいのあるものであった。

9 月 10 日～24 日　「派遣」

○9 月 10 日（火）　出国＆移動

羽田空港を出発し、ミュンヘン空港で乗り継ぎ、ベルリン・テーゲル空港着。そのままベルリン市内のホテルへ。

○9 月 11 日（水）　ベルリン日独センター訪問＆研修

ベルリン日独センターで、ザクセン州青少年連合事務局長ヴェンケ氏の講義を受けた。ドイツでの青少年援助制度やボランティア活動などについて、詳しく学ぶことが出来た。他にも、「若者の社会参画」をテーマにワークショップやレクリエーションを行い、参画とは何かについて、体験した。さらに、団員で話し合い、発表することでそれぞれの考え方を認識した。

○9 月 12 日（木）　U25 訪問＆ディスカッション、ベルリン市内歴史研修

午前中は、U25 という 25 歳未満オンライン自殺予防相談を訪問した。講義の中で、ドイツの自殺の現状を詳しく学び、日本の現状と比較しながら意見交換を行った。男女で自殺に差があることや自殺がタブー視されることで学校と連携が出来ないなど、多くの学びがあった。

午後は、ベルリン市内歴史研修があり、東西の分裂とベルリンの壁、ドイツ統一に至るまでの歴史などを実際にその場所を訪問し、詳しく知った。残された一部のベルリンの壁、亡き人々の名前が刻まれた石が埋め込まれた地面、虐殺されたヨーロッパのユダヤ人の記念碑などを巡った。現在、ドイツの人々がどのように過去の出来事に対して向き合っているのか目で見て、その場に立ち、肌で感じた。夕方からは、夕食会と交流会があり、日本での合宿セミナーで出会った今年度ドイツ団員たちと再会した。

9 月 13 日～15 日　「合宿セミナー」

○9 月 13 日（金）　自主研修、ラーヴェンスブリュックに移動＆ドイツ青年との交流

午前中は、ベルリン市内で自主研修を行い、各自ドイツの雰囲気を体験した。

午後は、ラーヴェンスブリュックに移動し、ドイツ団員たちと一緒に合宿セミナーを行った。合宿セミナーは第二次世界大戦時の女性の強制収容所跡地を再利用した施設で行われ、当時、女性看守が寝泊まりしていた施設に宿泊した。

○9 月 14 日（土）ラーヴェンスブリュック警告・追憶の場所見学＆班別ディスカッション

朝食後、ドイツ団と一緒にドイツの体操（シュピドゥー）を行った。その後、ラーヴェンスブリュック警告・追憶の場所（強制収容所）の見学を行い、自国の歴史とどう向き合うのか、向き合うことで未来にどう活かすかについて学んだ。過去から学ぶことが社会全体の責任であり、次世代に引き継ぐことの難しさを知ることができた。

午後は、午前の内容のまとめを行った後に、班別ディスカッションを行った。「若者の社会参画：私たち一人ひとりにできること」をテーマに、両国の社会問題を取り上げ、それらに対する解決方法やそれぞれのできること、やりたいことについて意見交換を行った。身近なことから一人ひとりができることを考え、客観的にものごとを捉えることの重要性を学んだ。

○9 月 15 日（日）　班別ディスカッション

朝食後、ドイツ団と一緒にラジオ体操を行った。その後、前日同様に引き続き「若者の社会参画：一人ひとりにできること」をテーマに、班別ディスカッション行った。発表の際は模造紙や劇で発表を行い、自分たちのディスカッション結果を共有した。この活動で、社会参画について、深く考えることができた。

○9 月 16 日(月) ドイツ自然保護連盟（NABU）青少年部（NAJU）ナーユー連邦事務局訪問

ドイツ自然保護連盟（NABU）青少年部（NAJU）ナーユー連邦事務局を訪問した。講演の中で、組織が主に青少年によって運営されていることを知った。また、生物多様性を保全するために行う子供向けイベントや“ビーズ・イン”と呼ばれるミツバチのためのホテル運営、トラッシュバスターズ・アクションウィークなどの活動を知ることが出来た。

○9 月 17 日(火)　民主主義と勇気ネットワーク（NDC）＆ドレスデン旧市街地見学

午前中は、民主主義と勇気ネットワーク（NDC）ドレスデン支部を訪問した。団体に関する説明を受けた後、実際に彼らが行うプロジェクトの一部であるワークショップを体験した。そこから、結果と結びつけて世界の難民の実情について、ディスカッションを行った。ドイツでは余暇の使い方として、ボランティアが理解されていること、青少年だけではなく、企業に対してもプロジェクトを行っており、企業は時間を割いてでもこのプロジェクトを実施していることを知ることが出来た。

午後は、ドレスデン市内ガイドの斎藤雅子氏にドレスデン旧市街地を案内して頂き、夕方にはホストファミリーとの夕食会を行った。

○9 月 18 日(水) ドレスデン工科大学政治学研究所訪問＆ドレスデン市青少年消防団訪問

午前中は、ドイツ団のシュテファン団長が勤務しているドレスデン工科大学政治学研究所を訪問した。学校などを対象に提供している「政治を学ぶ」ことを目的とした貿易ゲームの体験や質疑応答を通して、民主主義や政治教育について考える力の重要性を学んだ。またドイツでは、社会参画を促すことを目的に学校のカリキュラムの中に政治教育が組み込まれており、幼少期から政治に関する判断力、寛容力、批判力、分析能力を養われることを学んだ。

午後は、ドレスデン市内のゴムピッツ消防団を訪問した。地域におけるさまざまな消防ボランティア活動を通して、身についた共同体意識や責任感などが、仕事やプライベートにも生かされていると知った。その後、屋外に出て実際にボランティアの子供たちによる消防訓練を見学した。

夕方は、青少年消防団の方と交流会を行い、子どもたちと腕相撲を行うなど、楽しい時間を過ごした。

○9 月 19 日(木)　青少年ハウス「マライケ」訪問

青少年ハウス「マライケ」を訪問した。ここでは、生活保護受給者や一人親家庭の子供たちを取り巻く様々な問題を改善させることを目的としており、貧困のサイクルを断ち切るための必要な日常支援を行っている。施設見学やマライケを訪れる子供たちとの交流を通じて、我々の固定概念や子供の権利など、考えることが多くあった。また、マライケのボランティアに関しては、人手不足などの問題があることを知った。

○9 月 20 日（金）　FridaysForFuture 運動に参加している生徒と懇談&質疑応答

午前は、ドレスデン市役所にて FridaysForFuture（フライデーズ・フォー・フューチャー）運動に参加している 16 歳の少女サラさんと懇談を行った。気候変動に対して、真剣に考え『誰かが始めないといけない』と強い意志を持つ彼女に、他人事ではなく自分事として考え、自ら行動することの大切さを感じた。その後は、ヴェンケ氏を講師に、事業全体を通しての質疑応答・意見交換を行った。10 日間を振り返り、ドイツの問題や若者の社会参画について議論し、学んだことを再確認した。

午後は、学習成果発表会について、日本団ミーティングを行った。その後、各団員は、それぞれのホームステイ先へと向かった。

○9 月 20 日（金）夕方～22（日）日昼　ホームステイ

それぞれのホームステイ先で交流を行った。観光やゲーム、ホームステイ先の子どもと遊ぶなど、交流の様子はそれぞれ異なったが、全員がドイツの日常や文化を体感し、有意義な時間となった。

○9 月 22 日（日）　学習成果発表会＆歓送交流会

「偏見・環境・ボランティア」の 3 つの班に分かれて学習成果発表会を行った。2 週間の滞在で私たちが学んだこと、日独の相違点、今後どのように生かすのかについて考えを発表した。

その後、ホストファミリーとの歓送交流会を行い、ホストファミリーと最後の時間を過ごした。

9 月 23 日（月）移動&帰国

ドレスデン空港、ミュンヘン空港を経由して日本へ。

9 月 24 日（火）到着

羽田空港に到着し、解散。

４．学習成果発表会

私たちは、日独学生青年リーダー交流事業に参加して社会問題、社会参画、歴史など数多くの講義を聞き、ディスカッションを行った。そこから人種差別、環境問題、デモなどの政治参画活動において、日本とドイツの考え方に、多くの違いがあることを学んだ。新たな視点を得たことで、課題に対する視野が広がり、自分たちの考えや行動について改めて考えるようになった。そして、学習成果発表会では、日本団が日本に持ち帰りたいことが一番伝わる３つのテーマで、ドイツ研修を通して学んだことを発信しようと考えた。「ボランティア」、「環境」、「偏見」である。これらを通して日本団の伝えたいことを発信したい。

（１） ボランティア

今回の事業で特にキーワードとなったことは「ボランティア」である。まず日独のボランティアの相違点を考えた。そこから、日本のボランティア活動をよりよいものにするためのアプローチ方法を見つけることとした。

１）日本とドイツの相違点

①ボランティアに対する意識の違い

【日本】

就職活動など将来の自分のためにボランティア活動を行う人が多いように感じた。極端に言えば、「履歴書の空白を埋めるため」ともいえる。

【ドイツ】

今回の研修で話を聞いた方の多くは、社会のために活動を行っている。自分が社会のおかげで生活できているという意識を持っており、社会に恩返しするために活動しているという意見を聞いたが、日本ではあまり聞かないと感じた。

しかし、上記の考え方が全てではないとことも、今回の事業で知った。ドイツでも日本と同じように「履歴書の空白を埋めるため」という考えを持った方が多くいるそうだ。逆に、日本でも私たちがあまり知らないだけであって社会のためという意識をもって活動している方もいるはずである。

②社会からの評価

【日本】

ディスカッションにおいて、日本では、ボランティア活動が正当な評価を受けていないという意見が多く出た。ボランティアは「よいもの」という認識が多くの人に存在するものの、ボランティアの定義が狭く、私生活を犠牲にするほどの活動に対する理解は得られにくい。

例えば、日本ではボランティア＝災害ボランティアというイメージが強いと思われる。なぜ、そのようなイメージが定着したかを考えると、マスメディアに影響されているところがあるだろう。特別な出来事を中心に取り上げていく日本のメディアにおいて、ボランティアが注目されるのは、災害の場であることが多く、人々のボランティアに対する印象形成において大きな影響を与えている。そのため、それ

以外の活動が「ボランティア」として認められにくいというのが現状ではないか。

【ドイツ】

ドイツでは、ボランティア活動は高く評価されている。今回訪問した消防団では、「ヒーローになろう」というキャッチコピーを揚げている。まさに、ボランティアが高く評価されている事がよくわかる事例であろう。社会で高く評価されているため、手厚い保障や補助金制度の充実につながっていると考えた。

③アピール

【日本】

日本では、自分の活動について周りにあまり話をする機会がない。自らボランティアについて話すと自慢のように聞こえるという考えがあるからだろう。相手から質問されなければ、話すことが少ないため、その人自身が行う活動を周りに認知されていないのが現状である。

【ドイツ】

ドイツでは、相手に対して、自ら自分の活動を話して、アピールしている。友人や家族との会話の中で、ボランティアに関する話題になり、お互いの活動について話すことが多くあるとのことだ。日本では、友人との会話でそのような話題が出ることはないため、日常における意識という点で日本とドイツは大きく異なる。

2）アプローチ方法

私たちは、日本でボランティア活動に対する評価を高め、活動を広げていくためには、私たちは周囲に活動を知ってもらうことが重要であると考えた。

まず、自分たちがモチベーションを維持し、ボランティアを続けていくためには、活動を知ってもらい、評価されることは重要な要素であろう。そして、周囲の人から理解を得るためにも、活動の実態を知ってもらうことは重要である。ボランティアに対する知識を人に伝えるためには、自分自身が活動内容を伝える必要がある。それは、公式な宣伝の場だけでなく、日常生活における家族や友人との会話など、身近なところから始められるのではないだろうか。活動に対して、多くの人が理解や興味を持つことで、日本におけるボランティア活動はより盛んになるであろう。

（2）環境

私たちは、2 週間という短い期間ではあったが、ドイツの日常生活やドイツ青年との意見交換を経て、「環境」について考えさせられることが多くあった。ここでは、「ドイツで学んだこと」、「日本とドイツの相違点」、を挙げたのちに、私たちがこれから起こすべく環境においての「アプローチ方法」を紹介したい。

1）ドイツ研修で学んだこと

①デポジットシステム

スーパーマーケットにデポジットシステムが普及している。ペットボトルや缶をデポジットの回収マシーンに入れるだけで、1本につき25セント、ビンの場合は8セント返ってくる。利用可能な容器のラベルには「Pfandflaschen」のマークがあり、マシーンはバーコードで読み取るため、ラベルを取ってしまうと返金不可になってしまう。ドイツでは、このようにお店で飲み物を購入して、このデポジットシステムを利用しないと、損をする仕組みになっている。このデポジットシステムは、ドイツの環境を意識した消費者に対する巻き込みが上手な一例と言えるだろう。

②軽包装

包装の簡易化が進んでいる。パン屋で複数個のパンを購入した際、1つの紙袋にまとめて入れることやスーパーマーケットでは、青果物を無包装のまま持ち帰ることが多い。また、エコバッグを持参するという意識よりも買い物＝大容量のバッグが必要という消費者意識が根付いている。

③普及活動

私たちが研修六日目に訪問したNAJU（ドイツ自然保護連盟青少年部）では、15歳未満の子どもを対象とした啓発活動や自然教育など、環境について知る・考える機会を多く提供していた。考えや価値観が確立されにくい年頃の子どもに、このような機会を設けることは非常に重要であろう。また、NAJUは、ドイツ国内に多くの支部を構えると同時に、NGO グリーンピース(国際環境保護団体)やBUND（ドイツ環境自然保護連盟）などと連携しながら、このような活動をドイツ全土で行っている。

2）日本とドイツの相違点

①消費者意識

【日本】

「もったいない」、「節電・節水」という言葉が浸透しているが、多くの人は、商品を購入する際に量や値段、質などを重視して選ぶ傾向がある。

【ドイツ】

環境に配慮した商品を選ぶ傾向が強く、ここ数年ブームのBIOショップの拡大も、それを裏付ける1つの事例である。私が実際ホームステイした家庭は、ほとんどの食品・日用品にBIOやエコマーク認定がついていた。また近年、環境に対する配慮が理由でベジタリアン・ヴィーガンになる人も増加傾向にあり、現在は人口の約10%を占めている。

②ゴミ箱の数

特にベルリンでは、公園や歩行者用の道沿いに数十メートル間隔でゴミ箱が配置されていた。また、電車の4人がけのボックス席にもゴミ箱が設置されており、何度か中を確認したが、空のゴミ箱が多かった。町のゴミ清掃員が定期的に回収しているのか、本来のゴミ箱の機能を果たしているかは不明であるが、ゴミ箱の数はこ

こ最近の日本とは比較にならない程、多くあった。両国ともに、ゴミの廃棄問題は深刻化しており、これから改善すべき問題であろう。

③価値観

【日本】

「お客様は神様」であり、顧客と労働者には心の距離がある。また、コンビニエンスストアも多数あり、お店に困ることはない。

【ドイツ】

「労働者のための環境づくり」という価値観が根付いているのではないかと感じた。その理由として、ドイツでは「閉店法」という法律の下 24 時間営業のスーパーはほとんどなく、日曜・祝日は休業することが普通である。日本で休日にシャッターを下ろすことは考えられないため、初めは衝撃的であった。この法律は、節電や節水､人件費の削減といったメリットも多く､環境にも労働者にも優しいと感じた。

３）アプローチ方法

最後に、これらの学びや気づきを踏まえたうえで考えた、地球環境を少しでも良くするための５つのアプローチ方法を紹介する。まずは、私たちが正しい知識・情報をインプットして、これらを実践していくところからスタートしたい。

①マイマグカップ・ドギーバッグの普及

現在、日本ではマイマグカップ持参で割引対象になるお店は、コンビニの一部の店舗やスターバックスコーヒーなど、わずかの店舗に限られている。しかし、私たちの身近な家族や友人から、このメリットや裏に隠された環境問題について、柔らかく発信していくことで、少しずつマイマグカップを持つ人が増えるのではないだろうか。

そして、フードロス削減のためにつくられたドギーバッグを広めたい。ドギーバッグとは、フードロス削減のために作られたもので、お店で食べきれなかった物を自己責任で持ち帰るバッグのことである。

②デモ

今日、Fridays For Future が行っている気候変動デモが世界的にも注目されている。このようなデモは、日本でも都市部を中心に広がりつつあり、まず、私たちがデモを起こす前に、参加するところから始めたい。

③世界週末時計（環境問題 ver）

世界週末時計とは、核戦争などによる人類絶滅の危機をカウントダウン式の絵で表したものである。その環境問題バージョンを作ろうという試みだが、作成には、ハードルが高いと考えており、私たちは長期的な視座で考えている。

④イベント開催

誰でも、楽しく、気軽に、参加できるイベントを開催する。エンターテイメント性を織り交ぜながら、環境問題について知ってもらうことに重きを置き、開催したいと考える。現在、子どもを対象に環境問題について知り、考える機会を作るために自然教育キャンプを計画中である。

⑤環境対策を兼ねた料理開発

大学など、教育機関の食堂で環境に配慮した食事を期間限定で導入するという試みである。私たちだけではなく地球の全ての人の課題である環境問題について、無知・無関心な学生が多いのではないだろうか。そこで、学生が多く利用する食堂で、環境を意識するきっかけを作るものである。今は、規格外野菜とヴィーガン対応を取り入れた料理を考案中である。

（３）偏見

今回の事業で学んだことを大きく３つに分けたとき、そのうちの一つが「偏見」である。合宿セミナーで行った班別ディスカッションでは、話題が難民となった際に、日本団員の中には偏見を持っていたことに気づいた者がいた。日本団員が「ドイツの治安を悪化させているのは難民では？」と発言したところ、ドイツ団に猛反論されたのである。そのとき、難民に対して「偏見」を持っていたことに気づいた。また、民主主義と勇気ネットワーク(NDC)では、椅子を使ったゲームを通して、難民の受け入れや世界の富の所在について、私たちが偏見を持っていることを理解できた。

１）日本とドイツの共通点・相違点

【ドイツ】

ナチスに関係する遺跡、民主主義と勇気ネットワーク(NDC)の活動、身近に移民が多く存在する環境などから、偏見や差別に対して考える機会が多い。しかし、未だに性差別や民族差別は、ドイツ内に根付いている。

【日本】

ドイツと同じような性差別や民族差別は存在しているが、学ぶ機会は小学校と中学校の道徳の授業程度で、年齢が上がるごとに学ぶ機会は少なくなる。

２）気づき

人々は無意識のうちに偏見を持っている。偏見自体は悪いものでも良いものでもない。人種差別や性差別といった誰かが辛い思いをする悪い方向に働くことがあれば、新しい出会いや気づきを得るような良い方向に働くこともあるのではないだろうか。例えるならば、外見が怖い人に話しかけられた際に、見た目から自分に危害を加えるのではないかと判断し、拒絶するのではなく、会話してみると実は優しく自分と気が合う人であり親しくなるかもしれない。大切なのは、自分自身の中にある偏見に気づくこと、気づいた時にどうするかである。

３）アプローチ方法

①自分たちが持っている偏見に気づく。

②正しい知識を得る。

③周りに発信する。

偏見に対して向き合うことは勇気が必要である。私たちは、勇気を持って世の中にある偏見が良い方向に働くようにこの３つを実行していきたい。

（４）まとめ

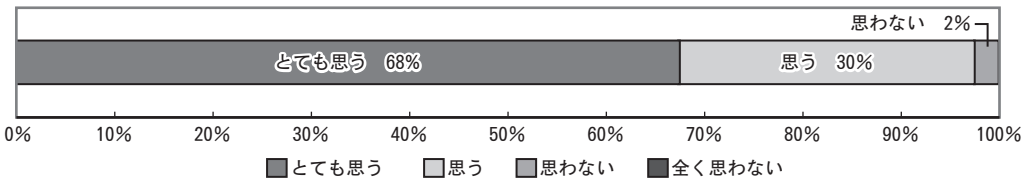
環境、偏見、ボランティアの主に３つのテーマについて考えてきたが、これらの３つのテーマに共通する問題点として、私たち若者の無知・無関心が挙げられる。世の中に存在する問題や事象を他人事として捉え、知ろうとしない若者が多いことが日本の現状である。偏見、環境、ボランティアの項目について、それぞれアプローチ方法を実践するのもよいが、日本団はそれぞれ異なる活動を行っており、そのアプローチ方法は千差万別となるだろう。したがって、幅広いこの現状を少しでも改善するためには、「私たちは一人ひとりが社会の一員であるということを自覚した上で，実践していくことが大事」であると考えた。

また、自分の周囲の人に呼び掛けることも大切だ。それは、家族でも友達でも自分の活動している団体でもいい。話してみると興味を持つ人がいるかもしれない。そこで、今回の事業で培ったリーダーシップを駆使し、発信の仕方や目標設定、組織内の環境構築をして、周りの人たちを導けば、周りを巻き込んで社会参画でき、環境は次第に変わるのではないだろうか。

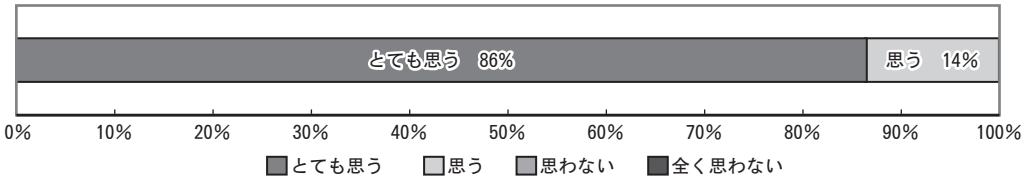
５．参加者アンケート

（１）アンケート集計結果

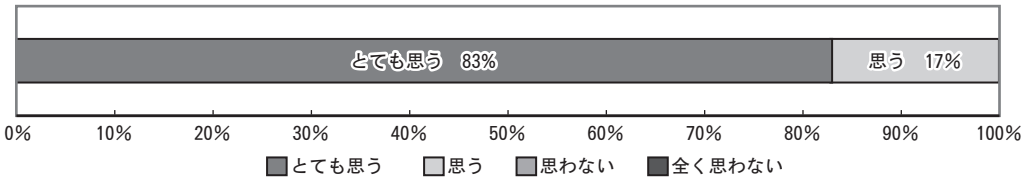
①日本人として世界に貢献したい。



②外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい。

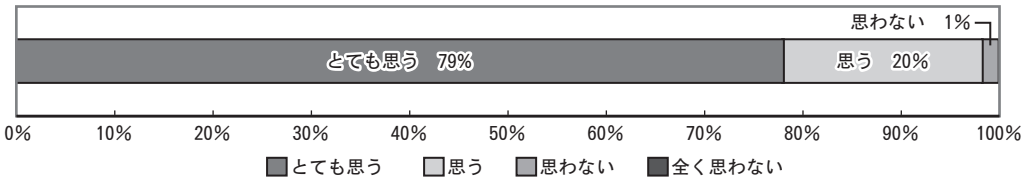


③交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたい。



（２）結果の分析

○外向き志向



【外向き志向とは】

文部科学省の定めた調査項目３項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか？」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか？」「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか？」のアンケート結果を集計したものである。国立青少年教育振興機構では、それらの問いに対して肯定的な回答の合計が 80%以上を得ることを目標とし国際交流事業を行っている。

（３）参加者コメント

・ドイツ団とのディスカッションを通して、自分の知識の無さを痛感した。
・周囲を巻き込み、若者が社会参画を行うきっかけになりたい。
・研修を通して、身近な物・今すぐ始められるものがたくさんあることに気づいた。
・自分にできる最大限のことを実施していきたい。
・自分一人では何も変わらないかもしれないが、声を上げ、周りを巻き込み活動することで社会を変えていきたい。
・今までの小さな活動も社会参画に繋がっていると気づかされた。
・環境問題について、自分のこととして認識し、マイボトルやレジ袋削減など、小さなことから取り組んでいきたい。

６．個人レポート

■氏名：浅山　莉奈
■所属団体：国立大洲青少年交流の家
■活動内容：子どもたち（幼児～小学生）や親子に向けて、野外炊飯、カヌー、クライミング等の体験活動を提供する

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画」について

「社会参画」について難しく考えすぎていたと感じた。私は、「どのような社会参画をしてきたか」という問いついて、最初は「選挙」という答えしかでなかった。しかし、同じ問いにドイツ団は、「選挙、ボランティア、デモ、消防団、地域の清掃等」と多くの答えを挙げていた。その中には、私が行っている活動もあり、知らず知らずのうちに社会参画を行っていると気づかせてくれた。実際にドイツに行くことで、自殺防止や環境問題、移民問題等について考え、話し合い、行動に移すことで、いい方向に変えようとする団体や人に出会い、話しを聞くことができた。身のまわりにある社会問題について関心を持ち、意識をするだけで、社会参画に繋がる。つまり、若者が社会参画をするためには、社会参画についての敷居を下げ、意識をする中で、小さな勇気をもって取り組むことが重要である。私は、周囲の人を巻き込み、話し、勇気を持って行動する中で、若者が社会参画を行うきっかけになりたい。

■ドイツでの学習をどのように生かしたか

私は、ドイツでの学習を終えて大きく２つのことを行った。

１つ目は、伝えることである。政治や歴史、環境、子ども等多くのことを学び、体験してきた。その学んだことを整理したのちに、まずは友人や家族にアウトプットした。周囲に伝える際には、周囲の人が社会に意識を向けてもらえるように、マイカップやエコバックを使用するといった環境問題について、歴史的背景から見たドイツ団の発言力や行動力について、等を話題とした。

また、学内で行った報告会では、少人数でボランティア活動を行うメンバーに、事業の概要や体験し、感じたことを言葉で伝えた。質疑応答では、「どこで偏見を感じたか？」と聞かれ、ディスカッションでの内容を伝えながら、偏見を持つこと自体は悪いことではなく、偏見を持っていることに「気づき」、どう行動するかが重要であると答えた。また、100 人ほどを対象に報告会を実施した際には、以前の私では実施できなかったと思うが、ドイツ研修で学んだ「勇気を持ち行動に移すことで変わることがある」、「一番の失敗は行動をしないこと」を思い出し、少しでも多くの学生に伝えたいと思い、報告会を行った。この場では、質疑応答の時間は取れず、どれだけの学生の心に響き関心を持ってくれたかは分からない。しかし、ある後輩からこの発表を通して、交換留学の決意をしたと言われ、参加した学生が興味を持ち、行動に移すきっかけになったのであれば、非常に嬉しく思う。

二つ目は、行動に移すことである。ドイツから帰国後、エコバックやマイカップの使用を始めた。少しのことではあるが、簡単にできる社会参画であり、周りにも広めたいと考えている。また、この事業に参加し、多くの人と出会い、話すことで新たな考えやコミュニティを得ることができた。これまでの自分は、見てきたものが狭いように感じたため、帰国後はより世界を広めるためにも他県で実施している研修会に積極的に参加している。初めての場所に行くことや知らない人たちのコミュニティに入ることは勇気がいるが、そこから学べることは多くある。一歩を踏み出す勇気を持つことで、世界は広がり続けることができると感じた。

私ができることはまだ少しのことであり、影響力があるとはいえないが、だからといって何もしないのではなく行動に移したい。そして、若者の社会参画とは何かという課題について考え、話し合った日本団、ドイツ団との繋がりを大切にしたい。これから社会を担う若者にできることについて、常に意識し、悩んだ時には助け合い、できることから少しずつ取り組み続けたい。

■今後、行いたいこと

事業を通して、自分自身の無知、人と出会い話すことの重要性、無関心などに気付くことができた。日本についての理解を深めるとともに、社会教育や国際理解などの点について、より深く学んでいきたい。また、色々な場所に行き、学びを深める中で、他者と話すことを行いたい。話し合いを行う中で、この事業の魅力を伝え続けたい。

■**氏名：**稲本　聖菜
■**所属団体：**①福岡県立大学　社会貢献・ボランティア支援センター
②福岡県立大学　不登校ひきこもりサポートセンター
③BBS サークル
■**活動内容：**①様々なボランティア活動への参加
②不登校の子どもたちへの支援③非行少年・少女の支援

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画」について

“現状を変えたい、より良くしたい”という思いや意識が社会参画のための第一歩になることを学んだ。ドイツの若者は、社会問題を主体的に考えている印象を強く受けた。このことが選挙活動や環境保護活動等への積極的な取り組みを可能にしている。私たちが社会に参画するためには、まず、今以上に自国の問題に関心を持つべきである。そして、問題について深く理解し、法律や制度をきちんと知る必要があると感じた。また、“社会参画”は難しいことではないと気づいた。選挙、リサイクル、ボランティア活動など、身近なもの・今すぐに始められることがたくさんある。一人ひとりの小さな行動が、これからの社会を担っていく若者に求められていると改めて認識できた。

■ドイツでの学習をどのように生かしたか

日独青年リーダー交流事業に参加し、若者が社会参画を果たすために様々な方法があることを学んだ。

この事業で得た学びを生かすために、私は、普段の自分の行動を振り返り、今後、自分に何ができるのかを考えた。ドイツに行く以前は、資源を大切にすべきことや参政権の行使が求められていることなど、社会参画の重要性を理解していた。しかし、実際は、環境保護のための行動や選挙へ行くという行為を徹底することができていなかった。そして、今回ドイツに行き、考えや思いを口にして、行動に移すことが社会参画であり、私たちに求められていることだとわかった。そこで、まずは身近なところからアクションを起こしたいと考え、ごみの分別とエコバッグの活用を意識している。次回の選挙では、政治について少し理解を深めたうえで投票したいと考えている。今後は、家族や友人にも、社会参画の必要性とその方法を伝えたい。

また、事業を通して、私は知識のなさを痛感した。話題として取りあげられた難民問題においても、現状や政策をあまり把握していなかった。また、ドイツ団とのディスカッション時にも、法律や教育制度、労働環境について、日本ではどうかという問いがあった時に説明できずに戸惑う自分がいた。私は、現在、社会福祉について学んでいるが、個々のニーズに応えるためには、法や制度について詳しく知っておかなければならないと日々感じている。これから、日本が抱える課題、法律、制度など自国についての知識をもっと増やしたい。そして、知らない人にも分かりやすく説明できる力をつけたい。

最後に、今回の事業を通して出会った日本団・ドイツ団の団員からも多くの刺激を受けた。彼らは、行動力だけでなく、周囲を巻き込む力を持っていた。また、全員が誇りを持ち、それぞれのボランティア等の活動に取り組んでいた。この志の高いメンバーと過ごしたドイツでの２週間は、私にとって、とても貴重な経験となった。ここでの学びを生かして、今以上にボランティア活動に積極的に取り組みたい。

■今後、行いたいこと

今回の事業で学んだことを家族や友人と共有し、考えを深めたい。社会参画については、日常生活で自分にできることは何かを考え、行動したい。そして、現在行っているボランティア活動を継続し、より有意義なものになるよう努めたい。また、これまでに経験したことがない分野の活動にも参加し、視野を広げ、様々な問題に対処できる柔軟性を身につけたい。

■**氏名：**遠藤　沙弥
■**所属団体：**独立法人国立青少年教育振興機構　国立妙高青少年自然の家
■**活動内容：**青少年に対する自然体験活動の提供

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

一番に感じたことは、“社会参画のしやすい環境がある”ということだ。特に、政治に関する意見交換で感じた。ドイツでは、学校教育で政党についての授業があり、選挙期間は様々なメディアから情報が入り、家庭で話題となる。政治に対して、意見を持つ環境が身近にあった。日本では、政治の授業や日常会話は少なく、選挙期間の広告も投票を促す内容が多いと気づいた。

また、“参画とは意見を述べ傾聴すること”ということだ。これは、団体訪問した際に感じた。活動内容の紹介と質疑応答に加えて、団体から日本団員の活動内容や意見を尋ねられることがあった。講師等から意見を求められる事があまりないため、新鮮であった。そこで、“参画”とは、意見を述べるのみだけではなく、傾聴も必要だと思った。他の意見を傾聴することは、社会に対する知識や考えが増えて広まり、社会参画の一つであると思った。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

ドイツで学習したことを社会参画に対する“環境”という面と“意識”という面で活かしていきたい。

まず、“環境”である。ドイツは若者の政治参加が盛んであり、その理由は、身近に情報が入ってくるということが上げられる。学校で授業があり、メディアから情報が流れ、家庭でも話題に出ている。投票に行き、自分の意見を表明することが社会の一部としての構成要素であると認識できるのである。また、いろいろな情報が与えられることで、関心の有無に関わらず、自分の意見を持つという環境がある。

日本でも自分の意見を持てるような情報の提供、環境の提供が必要なのではないかと考える。日本団では、日本の若者の課題の一つとして、「無関心」が挙げられた。これは、環境にも要因があると考える。環境は、私たち一人ひとりも含まれており、少しでも情報や環境の提供が出来る行動をしていきたい。現在は、ＳＮＳを活用し、情報の拡散が容易に出来るため、選挙の詳細を掲載したり、友人との話題にしたり、セミナーを開いたりと情報の発信、環境の提供をしていきたい。

次に“意識”である。以前、社会参画と聞いて思い浮かぶのは、選挙に投票することであり、何か声を上げて行動することと思っていた。交流の中で、ドイツ団員が「商品を買うだけでも社会参画である」と言っていた。これは、“商品のメーカーに売り上げに貢献し、会社を成り立たせる”という意味である。生活の一部が社会参画という意見がいくつかあり、難しく考えすぎていたことに気づいた。この言葉を聞いて、意識一つで様々な行動が社会参画になることを学び、帰国してから社会参画になることを探しながら生活するようになった。今までと同じ行為でも、社会参画を意識して行っている。この社会参画とは、堅苦しいものではないことを伝えていきたい。意識一つでただの買い物ではなく、社会参画の意味が含まれる買い物になる事や無意識の行動が社会参画の一つになりうるという意識を伝え、実際に姿を見せ、少しでも広まって欲しいと考えている。

また、私のボランティア活動は、主に子どもを対象としており、活動を一つの社会としたときに、子ども達それぞれが活動に参画できる環境をつくり、意識も伝えていきたい。活動を楽しむだけでなく、一つの活動を行う上で大事なことは何か、どうしたらこの活動がうまくいくのかを考える時間を作るなど、少しずつ考えられるようにサポートしたい。

■**今後、行いたいこと**

“自分事に捉える”ことをテーマに活動していきたいと考えている。社会参画は堅苦しく、誰かがやるものだと考える人も少なくない。少しでも身近に感じ“自分事に捉える”ことが出来れば、政治参加だけでなく、自然環境問題や国際問題にも関心を持てると思う。ＳＮＳでの発信、大学生向けワークショップの企画、子ども向けキャンプの企画等、ボランティアで学んだことも踏まえながら活動していきたい。

■**氏名：**岡村　太郎
■**所属団体：**SDGs 実践プログラム in ラオス
■**活動内容：**ラオスの教育活動に取り組む。2019 年 3 月にパクセを訪問し、現地の小学校で音楽の授業を実施。

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

若者が行う社会参画の一形態であるボランティア活動。私はドイツにおいて、ボランティア活動を行う倫理的根拠を探った。

滞在期間中、人権、社会福祉、地域コミュニティーと言った様々な分野でボランティア活動に従事するドイツ人と私は出会った。どの活動も人々の役に立ち、社会に恩恵を与える素晴らしいものであった。

講演中の彼らは、自身の活動に大きな誇りを抱いている様に感じた。私は自分のボランティア活動を振り返った時、彼ら程の自信を活動に持ち合わせてはいなかった。確かに、ボランティア活動に携わることで彼らの様に達成感や喜びは感じる。しかし同時に、私は今まで不安や無力感に苛まされることもあった。「自分の行いは正しいのか。」、「たった一人の力で社会に何が出来るのか。」と。

私がボランティア活動に関わったきっかけは、たまたま活動募集の案内を見たからである。しかし、すぐに応募した訳ではなく「専攻分野が違う。」、「きっと他の誰かがやるだろう。」と次々に言い訳が頭に浮かんで尻込みをした。ただ、ほんの一瞬「はるか遠くに居る、会った事もない人がもしも困っているのならば、手助けをしたい。」と思った時、一歩前に踏み出していた。どちらになるかは紙一重であったが、不思議なことに一度始めると決めたら、後はどんどんその方向へ進んで行った。そして、今に至る。

ラテン語に起源を持つ volunteer は、その言葉の中にイエスの隣人愛の様な倫理観を含んでいると私は思う。それは、誰かに手を差し伸ばして共に未来に歩んでいこうとする姿勢である。私とドイツの彼らの様に、例え活動に対する考えや思い、取り組む内容が異なっていたとしても、この温かみのある人間らしい心の働きは同じだと気付かされた。

ボランティア活動の根底にある共通の精神を認識出来たことは私にとって非常に大きな意義があった。ドイツでの経験は自分の活動をこれからも信じて続けていく糧になると私は確信している。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

自然・環境保護活動を行うドイツ自然保護連盟青少年部の講演を受けて、環境問題に関心を持つようになった。帰国後、今すぐに出来る具体的な行動を起こす為、環境問題の中で廃棄物処理問題に焦点を絞り、ゴミを自動で分別するゴミ箱の製作に取り組んだ。活動は、インド工科大学ハイデラバード校の学生 2 名と立命館大学理工学部の学生 2 名と協同で実施した。10 月と 11 月は各大学で出るゴミの量と種類に関して調査を行い、データを集め、12 月は実際にゴミを自動で分別するゴミ箱の試作品を製作した。試作品は、マイコンとセンサー、モーターを使用する事で、最終的に金属類と固形物を自動で分別する事に成功した。

11 月 29 日から 12 月 2 日まで長野県の松本と岐阜県の高山で開催された「2019 年度 日露学生フォーラム in 信州」に参加し、フォーラムの参加者に日独学生リーダー交流事業で体験した内容を紹介した。発表を行った際、ロシア人の学生は非常に好意的に受け止めてくれた。
また、フォーラムで所属した分科会の司会進行を務めて下さった信州大学のドイツ人の Amanda 先生は、ベルリン日独センターに 10 年間勤務された経験があり、過去の日独交流事業を担当された経験もあった為、今年度の日独交流事業の内容を紹介した際、非常に懐かしんで喜んでいた。

■**今後、行いたいこと**

ホームステイでお世話になったホストファミリーが 2021 年の春に東京、京都、大阪を訪れる予定なので、歓迎しておもてなしを行いたい。
自分が取り組むラオスでのボランティア活動を、今後も継続して更に発展させていきたい。

■**氏名：**小野　紗留
■**所属団体：**トムソーヤクラブ
■**活動内容：**定例ミーティングや現場宿泊研修、テーマ別研修を経て、子どもたちと関わるキャンプリーダーとして活動

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

二週間の研修を経て、「若者の社会参画」について深く考えられた。社会参画とは、現在の状況や環境に満足せず、常に社会に目を向けて行動することである。ドイツでは、日本よりボランティアや選挙活動などの社会参画に若者の積極性を感じられた。例え、小さいことでも自分の意見を相手に伝えるという行動が、一つの社会参画である。このように、私たちの身近に社会参画はあるのだ。自分の意思を意見として言う勇気を持ち、コミュニケーションを取ることが身近に社会参画できることだと考えた。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

事業に参加し、とても貴重な体験した。この事業は、ドイツ派遣だけでなく、日本団員との出会いやドイツ団、ドイツでの訪問先の担当者など、多くの人との出会いがあった。一人ひとり考えがあり、コミュニケーションを取ることで、より多くの学びを得ることができた。日本団員という新しい仲間に出会い、日本団から学ぶこともあり、刺激を受けた。生活する場や育った環境も違い、ボランティア活動もそれぞれ異なっている。一人ひとりとコミュニケーションを取ることで、異なる考えや意思を持っていることに改めて、気づいた。日本団員だけではなく、この事業で出会った人との関りを大切にし、今まで関りのなかった人とコミュニケーションを取り、自分のコミュニケーションスキルを上げていきたい。

また、この事業で「ディスカッションの大切さ」を学んだ。情報交換や共有、アイディアを出し合い、一つの問題を解決するために協議することで、ディスカッションの大切さを学んだ。私が所属する団体の活動では、活動の企画や運営について、ディスカッションを行うことはあるが一つのテーマについて、ディスカッションを行う機会はなかった。これからテーマを確認し、そのテーマについて、議論することを取り入れたい。

さらにドイツ研修を通して、ボランティア活動の規模の大きさや後継制度について学んだ。日本では就職とともにボランティア活動との関りが薄れることが多く、関わりを継続するためにも、事業に参加したことやボランティアでの活動を発信していきたい。自分たちの活動を次に活動する人につなげ、活動を継続させたい。

■**今後、行いたいこと**

今回の事業で学んだことを周りの人に発信し、ボランティアなどの社会参画が私たちの身近にあることを伝えたい。ボランティアは特別なことではなく、当たり前のことという意識で活動をしていきたい。

■**氏名：**加藤　清佳
■**所属団体：**新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部ボランティアセンター　学生ボランティアコーディネーター「ぼらくと」
■**活動内容：**学生ボランティアコーディネーターとして学内で活動、また子どもたちを対象とした事業の企画・運営

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

私は社会参画という言葉から、政治や社会問題など私たち自身では解決することができないものだと考えていた。しかし、実際にドイツ団とのディスカッションやドイツでの講義を受けて、社会参画は私たちも関わっていくことができ、私たちが積極的に働きかけていけるものだと学んだ。環境の面では、ドイツはレジ袋がほとんどなくデポジット制度があり、積極的に参加する取り組みが行われていた。日本でもレジ袋の購入などが取り組まれているが、エコバッグを持ち歩く人は少なく、環境問題に対する意識の違いを感じた。

ディスカッションを行う中で、私を含め日本側は、自国の制度や活動、歴史についての理解が浅いと感じ、もっと自国の理解を深める必要があると学んだ。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

1つは、ドイツで学んだことを周囲に発信したことである。ドイツ派遣を通して、学んだことを私が所属しているボランティアセンターで配信している広報紙で特集記事を作成し配信した。この広報誌は、大学内の学生、教職員に配信されていること、また大学のホームページにも掲載されており、より多くの人の目にとめてもらうことができたのではないだろうか。その広報紙では、特に伝えたい3つを載せ、私がドイツで感じたこと、ボランティアに対する意識の違い、環境問題に対しての取り組み方の違いを取り上げた。また、広報紙で配信するだけでなく、所属しているボランティア団体、大学の先生に向けて活動報告を行った。そして、家族、友人にも学んだことを伝えた。そして、私は学習成果発表会でボランティアについてのまとめを発表した。そのときの内容にあったように、ボランティアに対して無関心の人たちを巻き込むためにボランティアに対するハードルを下げることが課題だと考えた。今まで、ボランティアに無関心な人に対して、自分は何も行動することなく無関心であったと感じた。私は普段、ボランティアセンターで学生ボランティアコーディネーターとして活動しており、その中でボランティアに行きたいが一歩を踏み出せない消極的な人や不安な人に、自分の体験談を話し、一緒に参加してみないかと誘うようになった。このようにセンターで対応する学生に自分の経験を話すことで、少しでも魅力に気付いてもらい一緒に活動する仲間を増やしていきたい。

2つめは、自分の生活に取り入れることである。今までは環境問題に対しての知識が足りず、それゆえに行動できていなかった。買い物の際は、エコバッグを持ち、ビニール袋を受け取らないこと、マイボトルを使用するなど自分にできることから微力ではあるが取り組み始めた。この研修で、自分の意見を持つことの重要性を改めて考えた。政治面では、以前よりニュースを見るようにしている。一票では変えることは出来ないかもしれないが、情勢を知り、自分の考え持つことも社会参画ではないかと考える。自分が生きる社会に関心を持ち、自分も社会の一員であるという意識を持ちたいと考えている。

■**今後、行いたいこと**

私は、ドイツ団とのディスカッションで、政治や社会問題、歴史に関する自分の知識の無さを痛感した。自国の政治の動きを理解するとともに、世界の社会情勢に目を向けていきたい。また、異文化に触れることに興味を持ったため、国際交流や海外研修のプログラムに参加したいと考えている。そして、ドイツ派遣で学んだことを今後の活動に生かしていきたい。

■**氏名：**佐々木　翔
■**所属団体：**独立行政法人国立青少年教育振興機構　法人ボランティア
■**活動内容：**青少年の健全育成を図ることを目指し、キャンプや農業体験など子供たちの自然体験活動を推進

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

若者の社会参画について、日本とドイツで比較すると取り組まれている内容の規模（政治、環境など）こそ違えど、課題や取り組みは両国とも近いものをもっていると感じる。環境活動については、両国とも家庭でのプラスチック分別から、積極的に社会活動（プラスチックゴミのリサイクルやCO２削減）に注目し取り組んでいると感じた。政治活動については、両国とも若者の政治に対する関心の薄まりが指摘され、投票への呼びかけが行われている。一方で明確な違いもあった。ドイツでは家庭や学校など、日常的な生活の場面で社会参画について議論する機会が多く、Fridays for futureなど若者が意見を述べる活動が多いと感じた。日本では社会参画について議論、意見することは難しい部分がある。ドイツでは一人ひとりが意見を述べることが尊重されており、役職やスキルに関わらず、その人の意見をしっかり受け取る。おかしいと思ったことには疑問を述べ、しっかり話すことが大事だと学んだ。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

ドイツで学んだ意見を述べしっかり受け止めること、社会問題について考えることを実践している。

まずは、学んだ内容を大学でプレゼンテーションすることで、身近な人から情報の共有を行った。内容としては、大まかに５テーマ「１．目的と目標（交流を通して文化・価値観を知るなど)」、「２．事業内容（事業名称、事業趣旨、研修内容、実施機関、実施期間)」、「３．研修内容（事前研修、合宿セミナー日本、青少年関連施設、ボランティア団体等訪問、合宿セミナー独、ホームステイプログラム)」、「４．印象に残った出来事（文化、環境活動、日常生活など)」、「５．これからの行動計画（行動指針３大項目)」に分け、発表を行った。発表は２度行ったが、どちらも参加者は熱心に話を聞いてくれた。特にドイツにおける社会参画には興味があるようで、多くの質問を受けた。

また、自分ができることとして、エコ活動(マイカップ使用)や政治参画（投票）などを行った。それは、小さな活動でも継続して行えば、やがて大きな活動になると学んだからである。そうやって少しずつ活動することで、その活動は自分の習慣として根付き、周りの人に良い影響を与えるきっかけとなっている。学生の身分で出来ることはそれほど多くはないが、若い学生だからこそできることもあると思う。若者だからこそ同年代の感受性が高い若者に対して、ピンポイントに届く情報発信ができ、その情報が広がっていくことでもっといい未来にすることができると確信している。

この活動で日本全国に高い志を持った仲間ができたことは偉大であった。私は、ドイツから帰国して１カ月後に別の派遣事業に参加した。その際に、ドイツ派遣で日本団として一緒であったメンバーの友人と出会い仲良くなることができた。このような横の繋がりも派遣プログラムで得られたものであり、参画することやコミュニケーションをとることがいかに大切かを感じることができた。これにより、いつかは日本やドイツでの繋がりが意外なところに現れることもあるのではないかと思うとそのような人との出会いを大切にし、横だけでなく縦の繋がりも大切にしたいと思う。

最後に、このプログラムでは先進国の社会参画に対する取り組みを学ぶことができたが、それは高度経済成長期を終え、物質的豊かさより精神的豊かさが求められる国家だからこそ取り組める内容だと思う。一方で、国によっては様々な要因により環境問題への取り組みや政治参画への取り組みなど社会参画が難しい国もある。その実情を知らずに２国間の取り組みだけで世界を語ることがないよう気をつけたい。

■**今後、行いたいこと**

日本とドイツの魅力、国際交流の良さを発信したい。始めは自分が現地で感じたり学んだりしたことを家族や友人、所属団体など身近な所に発信したい。そして、将来的には多くの人に情報発信したい。今回の研修で得た体験は、自分次第で無限の可能性をつくることが出来ると考えている。そのためにもドイツで学んだ環境活動への取り組みや政治教育を忘れず、まずはエコ活動や投票など自分にできることを継続して行いたい。

■**氏名：**白木　すみれ
■**所属団体：**学生防犯ボランティア　ネット安全局アイリス
■**活動内容：**小中学校にて情報モラル教室を開き、ネットの危険性を認知してもらう活動をしている。

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

自分自身にとって、社会参画とは身近なものではないと感じていたが、ワークショップや講義を通して、社会参画とは、社会に対して関心を持ち、自らが考えて行動することだと感じた。他人事ではなく、自分の問題として、社会問題を認知することである。そして、自分たちが行っているボランティアも社会参画の１つである。このような考えに至ったことが大きな学びである。そして、私は「誰かが始めないといけない」と考えて活動を行う若者に感化され、自主的に報告書を作成し、所属ボランティア団体に提出した。

さらに、事前研修からドイツでの活動において、強く感銘を受けたものがある。日独両団とも皆が各々に考え、自分に出来る最大限のことを実施しようとしている。「政治や社会問題に無関心な人が多いのは何故か」、「私たちには何が出来るのか」について討論を始めると、時間が不足することも度々あり、白熱した討論ばかりであった。このような強い意志を持つ同世代の仲間と出会えたことが大きな収穫である。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

日本に帰国後、ドイツで行ったディスカッションの内容や訪問した場所、団体の中で特に防犯ボランティアに通ずるものや近いものを選び、共通点や相違点について学んだことや自分の意見を報告書として、所属団体に提出した。そして、今回の約２週間の研修を写真とともに家族や友人、大学の先生、ボランティアをしている仲間と共有した。しかし、「政治について」、「環境問題」、「ボランティアへの社会的評価」などについては、説明するが理解や受け入れてもらうことは難しいように感じた。

私がこれらについて考える機会を得たように、ワークショップなどを通じて他の人にも考える機会を持ってほしいと考えている。私は、大学で救急救命分野を専攻している。私の周囲には、医療や救急救命以外に対して無関心な人が多く、彼らに関心・興味を持ってもらうことが重要である。そのためには、まず彼らが身近に感じている「医療」や「消防」に関連するもの、「ドレスデン市青少年消防団訪問」について、写真を交えてプレゼンテーションを行った。その内容は、ドイツの消防団について、その他関連して両国のボランティアに対する社会的評価、ドイツの救急車や医療体制・メディカルハーブ（ドイツで個人的に質問した）、教育制度の違い、社会問題、自分が感じたことについてである。その結果、私の話に対し、友人たちは興味を持ったと感じている。質疑応答の時や授業終了後にも興味を持ち質問してくる友人たちがいたほどである。とても小さいことではあるが、徐々に皆の意識が社会へ向いたのではないかと感じている。私自身、大規模なイベントの開催は難しく、所属しているボランティア団体も大きくはない、さらには共に活動してくれる仲間は少ない。しかし、今回学んだ「誰かが始めないと、何も始まらない」ことから、少しずつ周りを巻き込み周囲の意識を変えていきたいと考えている。

今はまだ、小さなことしか出来ないが、今回私が得た新たな価値観、より広がった視野を今後もボランティア活動で活かし、自ら団体を立ち上げることを目標に、多方面で積極的に活動したいと考える。

■**今後、行いたいこと**

自分が出来る範囲で、周囲を巻き込み活動したいと思う。そして、今まで携わっていない分野にも興味を持ち、イベントや企画、ボランティアに参加したいと思う。さらには、ドイツ研修で体験したアイスブレイクやレクリエーションについてもボランティア団体の勉強会などで実施したいと思う。

■**氏名：**武田　将次
■**所属団体：**島根県立大学　総合政策学部　政策学科
■**活動内容：**海岸清掃、小学生の交流事業の手伝い、中学生の学習支援、高校生の政策発表会の手伝いなど

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

参画とは、計画に加わること(『広辞苑』)である。ドイツでは社会に対して、何かを計画し実行している、社会参画している若者と多く出会った。彼らとのディスカッションを通してわかったことは、自分から社会を変えられると考えていることである。それが「若者の社会参画」について、ドイツで学習したことである。この考え方は、社会参画をするうえで一番大切だと思う。この考えがなければ、社会参画しようとは思わないのではないだろうか。確かに、自分一人だけでは社会は何も変わらないかもしれないが、まず声を上げ、周りを巻き込み、活動することで社会は変えられるだろう。まずは、自分自身がこの考えを周りに発信し、周りを巻き込み、社会参画していきたい。それで、日本全体に影響を与え、日本の若者の社会参画を促したいと考えている。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

まずは、大学で報告会を行った。報告会を通して、参加者には社会参画、事業、ドイツについて理解してもらえたのではないだろうか。さらに、事業の報告会とは別に「国際交流活動について」というテーマの発表を行った時も、ドイツでの学習を写真と共に説明した。その発表は、学生と保護者に向けて行った。発表を通して、大学での国際交流活動について知ってもらい、国際交流活動自体に興味を持つきっかけになったのではないだろうか。

事業を通して、難民、政治、環境などの様々な社会問題について話し合い、社会に対して一層関心を持った。私は、日本に帰国し、改めて社会問題について考えた。人は、子供時代の環境が将来に影響するのではないだろうか。例えば、子供をよく勉強させる親の元で育てられた子供は、勉強が得意な人間になり、良い学歴を手に入れ、それが収入にもつながるだろう。一方で、親から虐待を受けながら育てられた子供は、劣等感を持ち、大人になってからも良好な人間関係を築くことが困難な傾向があるのではないだろうか。このように、子供時代の環境が大人になっても重大な影響を与えると考える。なぜ、これが問題かというと、子供は生まれる環境を選択できない。つまり、生まれた環境で人生が変わるということである。私は、今、大学でこの問題に取り組んでいる。授業や自習で子どもの権利や親の権利について学び、人はどのように生きるべきかを読書や人との交流を通して考えている。

事業を通して、ボランティアの良さを理解できたため、今まで以上に積極的にボランティア活動を行っている。その一つが、中学生に向けた学習支援だ。私が住む場所は学習塾の数が少ない。さらに、経済的に塾に通えない生徒もいる。そのような中学生に学習支援を行っている。私自身の勉強にもなるが、中学生の学力が少しでも向上出来たらと考えている。島根県立少年自然の家でのイベントにも参加し、原始人の服装をして子供たちに火おこしの方法などを教えた。これによって、子供たちの楽しい思い出づくりの手助けができたと考えており、自分自身も多くの人と関われたことで、新しい気づきがあった。

■**今後、行いたいこと**

今以上に、積極的にボランティア活動を行いたい。ボランティア活動を通じて、地域の方の力になり、自分の知識も増やす。また、社会について学習をする。事業を通して、自分の能力不足を痛感した。大学で学び、語学、法律、政治などの社会に対して出来る事を増やしたい。

大学を卒業後も、社会のために自分ができることはないかを考え、ＳＮＳで発信するなどの小さいことから、取り組みたい。

■**氏名：**谷口　花梨
■**所属団体：**兵庫教育大学ボランティアステーション
■**活動内容：**子どもを対象としたイベントの企画・運営やボランティアを行う学生の交流の場のコーディネイト

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

ドイツ団員との交流や青少年関連施設・ボランティア団体等への訪問を通して、少子高齢化や移民、自殺等、両国が共通して抱えている社会問題も多くあるということが分かった。それぞれの問題の中身や程度に両国で差はあるものの、問題に対する意識の差が日独ではあるように感じた。ドイツの若者は、社会問題を身近な物として捉え、自ら主体的に問題に対して行動を起こしている印象を受けた。一方で、日本の若者は社会で生じている出来事を他人事として捉え、関心を示そうとしていない。このことが、日独の若者の政治参画に対する意識の差にも影響を与えていると考えられる。これから身の回りの社会に目をむけ、知ろうとすることが社会参画の第一歩につながることを学んだ。また、自分だけが行動を起こしても何も変わらないと捉えるのではなく、たった一人されど一人と考え、一人ひとりが行動を起こすことが社会参画において重要であると学んだ。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

私がドイツから帰国して実践したことは、主に３点ある。

１点目は、大学での報告会の実施である。普段からボランティア活動に積極的に取り組む学生や海外に興味のある学生を中心にドイツでの学びを報告した。私は、本事業に参加したことで、自分の知らないことの多さに気づかされ、「様々な場所に行き、多くの人と出会い、新たな価値観に触れること」の大切さを参加者に伝えたいという思いで報告会を行った。そのため、私がドイツで得た新たな考え方やドイツの生活で衝撃を受けたことなどを交えて話を進めた。参加者の中には、私の驚きに共感してくれる方も多く、新たな価値観に触れるきかっけとなったのではないだろうか。加えて、人から聞くのではなく、実際に自分で体験してこそ得られることの多さも参加者に伝えた。また、質疑応答の時間には「ドイツと日本の子どもたちで違いはあるか」などといった質問もあり、この報告会を通して、国外のことに少しでも目を向ける機会となったのではないだろうか。より多くの人にドイツでの学びを伝えることができるよう、今後大学主催のイベントにおいても再度報告したいと考えている。

２点目は、社会で起きている出来事に積極的に目を向けることである。私は、ドイツに行くまで新聞を読むことや社会で起きている出来事について周囲の人と話すことはなかった。しかし、ドイツでの研修を通して、自身の知らないことの多さを痛感し、周囲で起きている出来事について、目を向けることの必要性を感じた。そのため、現在は、積極的に新聞を読み、ニュースを見るよう心掛けている。また、家族と新聞などの内容について、話す機会も多くなったように感じる。しかし、得た情報を周囲に発信すること、問題に対して行動を起こすことはまだあまりできていない。そのため、友人に対して情報共有を行うなど、小さなことからでも行動を起こしていけるようにしたい。

３点目は、海外の教育についての学習である。ドイツの政治教育や大学入試制度についての話を受け、所外国で教育には大きな差があることを改めて感じたとともに、海外の教育の中には日本で生かすことができる部分も多くあるのではないかと感じた。そこで、諸外国における教育事情について、もっと知りたいと思い大学で開講される海外教育について学ぶ授業を聴講することやドイツの教育に関する本を読むことを行っている。まだ学習を始めたばかりではあるが、今後も継続して行い、将来に生かしたい。

現在はこのような形でしか学びを生かすことができていないが、周囲の人々を巻き込み、ボランティア活動においてもドイツでの学びを行動に移すことができるよう努めていきたい。

■**今後、行いたいこと**

今後の活動として、大学の近隣地域に暮らすシリア難民の子どもたちに対する学習支援に取り組みたい。公立学校に通って教育を受けているものの、母語ではない日本語での授業となるため、学習に困難を抱いているのが現状である。そのような子どもたちが今より少しでも理解できるよう手助けするとともに、楽しい学校生活を送れるようサポートしていきたい。

■**氏名：**田宮　佑菜
■**所属団体：**東金市スポーツ推進委員会
■**活動内容：**地域におけるスポーツ活性化を目的とした団体。主な活動は市民駅伝やスポーツ大会の開催など

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

私はこのテーマに対し、漠然としたイメージを持って事業に参加した。なぜなら、社会参画と聞くと自分とは遠い、どこか他人事のように聞こえるからである。しかし日独両団の若者と各ボランティア団体の方々は、それを明確にしてくれた。皆が目的をもって行動しており、自分の意見をしっかり持っている。そんな彼らとのディスカッションはとても充実しており、新たな考え方に触れるきっかけとなった。また、ドイツ派遣期間中に訪れた団体でも刺激を得た。私よりずっと若い子までも自分の信念に従って社会に働きかけており、私は感銘を受けるとともに社会参画をもっと身近に感じるようになった。そして、今までの小さな活動も社会参画に繋がっていると気づかされた。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

私が、この事業を通して特に興味を持ったことが、環境問題である。ドイツ派遣では、「NAJU」を訪問したり、実際に「Friday for future」に参加している少女と対談したりと環境問題や環境保護に関することを学ぶ機会が設けられていた。さらに、ドイツでは、ペットボトルのデポジット制度やお店での軽包装を体験した。これらの体験を通して興味を持ったことで、最後の発表会では環境についてまとめることとした。環境問題がいかに深刻であるかを思い知らされるとともに、自分にできることは何かを考えるきっかけとなった。

これより、私は進路を大幅に変えることとした。大学後期の授業では、環境問題に関連した授業を多く選択し、今の自分には知識が足りないと感じており、授業や読書を通して学びたいと考えている。また、ゼミについても、環境問題に関連したゼミに変更した。さらに来年度より一年間のドイツ留学を予定していたが、もともと志望していた文化学に特化した大学ではなく、環境問題について学べる学部のある大学に変更した。上記よりわかる通り、ドイツ派遣が私に与えてくれた影響はとても大きなものとなった。

また、実際に行動したことは、まず私生活の見直しを行った。帰国後マイボトルを購入し、多かったペットボトルの使用量を格段に減らした。家族にも自分の意図を伝え、ペットボトルのごみを出さないよう努めている。スーパーやコンビニでの買い物時にプラスチック袋を受け取らないように心がけている。さらに大学では、「From Us TO Earth」という団体に現在所属しており、プラスチックボトルの利用率を下げるために、大学内にウォーターサーバーの設置を企画している。水を補給できる場所があれば余分にプラスチックボトル飲料を買う必要は無い上、マイボトルの利用を促進できると考えたからである。他にはごみを出さないようにお弁当を作ってピクニックを行う「No Waste Picnic」等の活動も行っている。

記述した内容は、環境問題に関することが大半であるが、私がこの事業を通して得たものの一つに「多角的な視点」が挙げられる。十人十色である日本団員やドイツ団員との交流を通じて、さらに視野が広がった。そして、これは上記の学生団体であったり、また日常においても大いに役立っている。

■**今後、行いたいこと**

私はドイツ派遣を通して得た興味は、環境問題だけではない。移民や難民、自殺予防、そしてボランティア等、今まで触れる機会の少なかったことも学ぶことが出来た。これらの興味を何となく持つのではなく、その分野に関してより知識を蓄え、自分自身で「できること」を考え、実行していきたい。

そして、来年度の留学では、夏休み休暇を利用してボランティアを行いたいと考えている。環境保護はもちろん、ドイツ団の友人が行っている移民保護のボランティア等、さまざまなことに挑戦し、周囲に恩返しできる人間になりたいと考えている。

■氏　　名：永田 侑大
■所属団体：芦屋大学ボランティア部 Aqua / 国立オリンピック記念青少年総合センター
■活動内容：芦屋市内のイベントの企画運営及び補助、イザ！カエルキャラバン！in 芦屋学園祭の企画運営等

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画」について

日本とドイツは別の国同士であるが、今抱えている課題や取り組みなどについては、両国ともに似ている点があると感じた。環境問題については、ドイツも積極的に取り組んでおり、ペットボトルや瓶のデポジット導入など日本よりも積極的だと感じた。政治については、両国共に若者の政治に対する関心が薄く、投票など積極的な政治参加が呼びかけられている。しかし、政治やボランティア活動に参加する機会や姿勢については、両国で大きな相違点があった。日本では、家族をはじめ友人等、他人と政治について話すことは禁忌されているが、逆にドイツでは家族だけでなく友人等、他人と政治について積極的に議論されている。また、社会に貢献することについて、両国とも自ら社会に貢献したいと考え、ボランティア活動を行う学生もいるが、日本では「履歴書のため」、「自分をよく見せたい」等、自分のために活動している。一方でドイツでは、「社会で生活しているから社会の為に行動することは当然だ」と、社会のために活動していることが相違点として挙げられる。

■ドイツでの学習をどのように生かしたか

今回、交流事業に参加し、とても貴重な体験をすることができた。ボランティア活動を行っている日本団員との新たな出会い、ドイツでボランティア団体や青少年団体を訪問して学んだことはもちろん、日本団員からも多くの学びを得ることができた。また、私自身の視野の狭さや固定概念に気づくことができ、客観的な考え方を持つことができたと感じている。ドイツでの学習では、規模を問わず多くのことを学ぶことができ、帰国後、まずはすぐに取り組めることから実践した。

一つ目は「積極性」である。ドイツでは、ドイツ自然保護連盟青少年部ナーユー連邦事務局、Fridays for Future 等のボランティア団体や青少年団体と懇談し、それらの中で日本とドイツの課題に取り組む積極性の違いを感じた。環境問題や政治に対して、若者が様々な考えや意見を持ち、声を上げて活動しており、「学生だからできないこと」はないと感じた。問題解決には難しい条件や課題があることが多いが、何も行動を起こさないのではなく、まずはできることから行動した。例えば、コンビニやスーパーマーケットで無料配布しているレジ袋を断ることやカフェを利用する際にマイタンブラー持参など小さなことではあるが、小さくても日々の積み重ねが大切だと改めて感じた。

二つ目は「話し合う姿勢」である。日本人は気配りや優しさ等から「おもてなしの国」とも言われるが、相手のことを考えすぎるあまり、言いたいことが伝わらないと感じた。合宿セミナーでは、政治へ参加する機会や姿勢については、両国で大きな相違点があることを知った。日本では、家族をはじめ友人等の他人と政治について話すことは禁忌されているが、逆にドイツでは家族だけでなく友人等、他人と政治について双方が言い合いになるほどの議論を交わしていた。議論をする上では、よい雰囲気づくりも必要だが、何を目的に議論しているのかを改めて考えた。帰国後に防災イベント「イザ！カエルキャラバン！in 芦屋学園祭 2019」の企画があり、運営スタッフと準備を進めていく中でより本音で言い合える場づくりを実践した。また、訪問やディスカッション等の交流を通じて視野が広まった。興味や関心を持つことで客観的に物事を捉え、問題解決への一歩となると感じた。ドイツでの学習を今後も継続的に生かせるように取り組みたい。

■今後、行いたいこと

本事業で、日本団の１人として、実際に交流することでしか感じられない日本とドイツの魅力を発信していきたい。さまざまなことに関心を持ち続け考えることはもちろん、今回の経験を踏まえ、自分ができることは難しさ等を問わず取り組んでいきたい。

■**氏名：**中野 愛
■**所属団体：**名古屋大須ロータリークラブ
■**活動内容：**国際交流をする青少年への支援や自身の国際交流の経験を沢山の人に伝えるなどといった活動

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

私は、[U25]25歳未満オンライン自殺予防相談に携わっている若者たちによる事業紹介や意見交換について、非常に興味深い話を聞けたと感じた。そもそも、日本でもタブーな話題として避けられることが多い自殺について、これまで深く考えたことがなかった。しかし、過労死が世界共通語になったことや日独の自殺の現状を知れば知るほど、日本でも早急に対策すべき課題の一つだと考えた。その対策として、オンラインでの相談受付は効果があるのではないだろうか。しかし、同時に、警察からは独立し、匿名性を保つということの利点と問題点は、検討する必要があると学んだ。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

日本とドイツの相違点や共通点を知ることや、実際に現地に行ってドイツの地を踏むことで、日本で生活するだけでは気づけない「海外から見た日本の問題点」に気づくことができた。これは、現在、日本で盛んに討論されている社会問題に対して、多角的な思考を持ち、解決策を見つける上で欠かせないことであろう。今回のドイツ研修で得た知識やドイツ・日本の友人から得たアイデアについて、周りに伝えることやそのテーマについて、議論する機会に生かしたと考えている。

また、今回、心を動かされたことの一つに、強制収容所の見学があった。結論から言うならば、自分自身が強制収容所についての知識が不足しており、訪れる前とのイメージとは異なっており、衝撃を受けた。事前にヴィクトール・E・フランク著『夜と霧』を読み、覚悟をしたつもりであったが、いざ実物を目にすると本をでは伝わらない重々しさに足が竦んだ。強制収容所では、凄惨な暴力を受けた人の思い、人としての尊厳を踏みにじられた人々の無念さや憤怒が伝わってくるようであった。過去に強制収容所で起きた出来事と向き合うことは辛いことである。しかし、過去に広島県の原爆ドームで被爆者の体験談を聞いた後に恩師が私に投げかけた言葉、「体験談を話してくださった彼女は、次の世代に原爆の悲惨さを伝えるという義務を果たされた。今度は貴女たちに次の世代に伝える義務がある。それを忘れるな。」を思い出した。今回の強制収容所の時も同様に、私は日本で強制収容所での出来事を伝える義務があると思う。この義務をきちんと果たせるよう努力したい。

当時のドイツ国民がナチス政治を冷静に判断し、批判することが出来なかったのかを考えることで、二度と同じことを繰り返すことがないように、私の体験を周りの人に伝えたい。そして、周りの人が過去を振り返るきっかけとなってほしいと考えている。

■**今後、行いたいこと**

私は、自殺予防の相談を受けている若者の活動に強く心を打たれた。また、私は人とコミュニケーションを取ることが好きである。また、海外留学を通して、楽しいことだけではなく、辛い思いも沢山経験した。これらのことを活かして、これから海外に飛び立つ若者や実際に海外で文化の違いから周りに馴染めない、言葉の壁を感じているなどの悩みを持つ若者の相談に乗りたいと考えている。

■**氏名：**西部 十翔
■**所属団体：**学生国際協力団体 SIVIO 東海支部
■**活動内容：**東南アジアのラオスに小学校建設をはじめとした教育支援活動を行っている。

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

事業に参加するまでは「社会参画」という言葉にあまり馴染みがなかったが、この研修を通して自分の中で社会参画の定義づけを明確にすることができた。それは、一人ひとりが社会の一員であることを自覚して、さまざまな問題や事象を自分ごとに捉える。そして、しっかり自分なりの意見・考えを持ち、周りを巻き込むべく主体的な行動に移していくことだ。ここに社会参加と社会参画の違いがあると思う。私が定義する社会参画は、エンパワーメントに言葉を置き換えることができるだろう。どんなに社会のため、環境のためにアクションを起こしても、それが自分一人の中で完結するような行動ならば、それは参画ではなく、社会参加になると思う。いかに周りを巻き込むことができるか、それが社会参画の肝だと私は考える。研修で出会った多くのドイツ青年は、自然と社会参画の意識を持っており、私も感化を受けた。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

私はドイツ研修全日程を終え、日本へ帰国するフライトの飛行機の中で、この研修での学びや気づきを紙に残した。私は性格上忘れやすく、今年に入ってからこの作業を習慣化している。おかげで帰国してからのアウトプットがスムーズにできた。

まずは、私の身近な友人や家族に、報告として興味深かったことや研修で得たドイツの実情などを話した。しかしながら、そのような報告をする相手が多くはないのが現実である。やはり、日本では自分と同世代の若者に社会的なテーマの話をすると抵抗を持つケースが多くあり、個人的に少し息苦しさを感じる時がある。自分たちの社会について、気軽に語り合えるような関係が構築できたらと感じている。

次に、大学の授業で、Powerpoint を使ったインタラクティブ式の報告会を実施した。その授業自体がドイツ文化研究という授業で、教授はもちろん受講者も全員ドイツに興味関心を持った学生で、随時質問や意見を受ける形で行った。聞き手が疑問に思ったことをその都度、質疑応答で対応することで、より詳細な内容を伝えることができたのではないだろうか。しかし、その一方で教授から与えられた発表時間を大幅超過してしまい、要点を得ない発表になったように感じている。さらに時間管理ミスが原因となり、本当に伝えたい内容が疎かになり、発表後に行う予定であったコンテンツを実施できなかった。発表のまとめをもう少し簡潔にする努力や発表内容の優先順位の確認など、多くの反省点や改善点が挙げられる。しかしながら、このようなに研修での学びや気づきを、自分で整理できたことを考えると、改めてアウトプットの重要性を感じた。

また、ドイツ研修を通して、自分が知っているドイツの知識や情報がいかに薄っぺらなものであったかを思い知らされた。毎朝、大学の図書館で新聞を読むルーティンが新たに自分の日常生活の中に組み込まれ、このようなドイツの経験を振り返ることが、来年度 1 年間休学しドイツに行くことを決意することにもつながった。この事業に参加したことが、強い覚悟で決めるきっかけとなった。

ドイツから帰国してまもなく 2 ヵ月が経ち、すっかり元の日常生活に慣れてきた中でも、これまでとは違った考え方や感情、ものの見方ができるようになった。さらには、新たな自分を発見することもあり、毎日が充実している。これからもチャレンジ精神を忘れずに精進していきたい。

■**今後、行いたいこと**

まずは、私が企画中のフードロスのイベントを成功させることに年内は注力する。また、同時に来年度の休学期間のドイツ滞在に備えて、英語とドイツ語の語学の向上に努めながら、現在、興味があるフードロスや食、環境問題などの研究を行いたいと考えている。休学中は、有機農家にファームステイしながら、ドイツ国内で環境問題に対して、ユニークな取り組みを行っているお店や企業を訪問して、YouTube 等を活用して発信したいと考えている。

■**氏名：**福原　稜太
■**所属団体：**高大連携キャリアサポートコンソーシアム、学生団体 Smoothie、IYEO
■**活動内容：**大学生と行政が共同で、高校生に対して対話型 WS を出張実施。

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

ドイツでは、「青少年援助法」（青少年育成及び支援）があり、青少年へのサポート制度が整っていると感じた。また、連邦・州・自治体がそれぞれの地域に合わせて、民間団体の独立を尊重し、民間を優先して援助や協力していることに驚いた。このように、1990 年ドイツ再統一を機に歴史的背景を踏まえて、市民が洗脳されることなく、多様性が生まれる環境が整備されていた。そして、実際にドイツの若者が「Fridays For Future」を通して環境を守る制度を強く訴えていることを肌で感じることができた。

今後、若者の社会参画において、「気楽・気軽・楽しい」「子供を巻き込む」ことが重要だと再認識することができた。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

ドイツでの学習を生かしたことは、大きく分けて２つある。

１つ目は「ボランティアの継続」だ。ドレスデンにある少年消防団は小さい頃から活動し続けることで、ボランティアを身近に感じ、ボランティアを通して自分の居場所や仲間を作っていた。ボランティアのやりがいと地域からの理解があるからこそ、大人になっても消防団のボランティアをしていると感じた。しかし、日本では大学生の期間にボランティアを続けていても、働き始めるとやめる人が少なからずいる。そこで、自分自身が継続してボランティアを楽しく行い、仲間を巻き込むことで、ボランティアに対する認識をより良くしたい。

２つ目は「環境問題」だ。ドイツでは、飲み物のデポジットシステムが普及していた。ペットボトルや缶・ビンはスーパーマーケットにあるデポジットの回収マシーンに入れることで、8~25 セントがキャッシュバックされる。私たちはこのデポジットシステムを利用しないと、損をする仕組みになっていた。このシステムは消費者をうまく巻き込む。ドイツの環境を意識した良い例と言える。私は日本でマイボトルを使用し、無駄にゴミを出さないようにしていたが、まだまだ余分に消費している物も多いと感じた。今まで以上に、環境問題やシンプルライフに重点を置きたいと考えさせられた。

短期的に政治教育の制度や人々の考え方を変えることは難しい。しかし、変えられないわけではない。私たちにできることがたとえ小さなことであっても、誰かに影響を与えることで大きな成果となる。「塵も積もれば山となる」という言葉があるように大きな変化を生むには、小さな行動を長期的に行うことが大切である。また、私たちから次世代の子どもたちに、そして、その子どもたちが次の世代に伝えていくことが長期的に変えていくことにつながるのだ。「草の根」という言葉があるように、幅広く、多くの人が小さなことから自分事として取り組むことが重要である。

■**今後、行いたいこと**

今後もボランティアを継続して行い、同じ目標に向けて行動する仲間を増やしたい。また、自然教育キャンプのように「気楽・気軽・楽しい」「子供を巻き込む」イベントを企画実施するつもりである。

■**氏名：**三村　美月
■**所属団体：**島根県立大学 BBS サークル
■**活動内容：**少年少女たちに、大人とは距離の近い同世代の、いわば兄や姉のような存在として、一緒に悩み、一緒に学び、一緒に楽しむことを目的としたボランティア活動

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

この事業を通して、ボランティアと社会参画について学び実感したことは、強制されるものではないということだ。どちらも大事なことは続けるが、強制されたものは、長くは続かない。そのため、参加する一人ひとりが根拠を持って活動に参加することが大事だと思った。しかし、環境問題、政治、ボランティア、ジェンダーなど、私たちが解決しなければいけない問題はたくさんあり、全てを完璧にこなすのは無理があると思う。何かひとつでも興味があること、自分がリーダーになれる分野を見つけ、真剣に取り組むことで自ずとリーダーシップが生まれるのではないか。また、専門ではない分野でも、自分の意見をきちんと持つことが、若者の社会参画の第一歩となるだろう。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

ドイツでの学習を通して、様々な反省や問題意識が自分の中で生まれた。その一つが、環境問題についての意識の低さである。今までも義務教育などで環境問題について学んでいたにも関わらず、どこか他人事のように考えていた。しかし、ドイツで講義を受け、実際に活動している人々の姿を見たことで、環境問題が今すぐに行動を起こさなければいけない身近な問題であることを実感し、今のままではいけないという危機感や焦りを感じた。そこで、日本に帰ってから、自分に何が出来るのかを考えた。エコバッグやマイボトルなどを活用し、無駄なゴミを出さないように努めたり、過剰包装の食品を避けたりと、小さなことではあるが、これからも続けていき、友人を中心に広めていきたい。また、私が興味のあるコスメやスキンケアの分野でも、環境に配慮した企業やブランドがあることを知った。そのようなものをエシカルコスメという。エシカルは英語で倫理的なという意味であり、環境問題やフェアトレードなど、倫理的なことを意識したブランドのことを指している。ドイツでよく見かけたヴェレダやドクターハウシュカなどもエシカルコスメに分類される。今まで、私が商品を選ぶ際には、値段や効果を重視しがちだったが、今では環境に配慮しているかどうかも重要なポイントになっている。毎日使う消耗品だからこそ、きちんと吟味し、選ぶことを続けていきたい。また、私はゼミで法律について学んでいるが、秋学期はテーマに環境法を選んだ。日本で起きた環境についての判例を多く学んでいるが、その中で、個人が公害調停、訴訟を通じて地球温暖化問題の解決に取り組もうとした事例があり、日本でも行動を起こしている人がいることを知った。他国での判例なども学び、環境問題対策について考えることが出来た。

環境問題に次いで重要性を感じたのは、歴史についてである。私は、世界だけでなく、身近な日本やアジアについての歴史も、十分に学ぶことが出来ていなかった、そして重要性を感じていなかったので、ドイツの若者たちとディスカッションをして、歴史への考え方の違いにとても驚き、影響を受けた。そこで、今は、大学で北東アジアの歴史に関する授業を受講し、現在のニュースで疑問に思ったことについて、自分で調べるなど、少しずつ知識を増やしている。

これらのことを外部に伝える手段としては、家族や友人たちに直接話すことや大学内で講演会を開くことを行っている。講演会は、座談会形式で行い、ドイツで学んだことや社会参画、ボランティアについての考え方等を発表した。

今以上に、ドイツで学んだことを学校生活やボランティア、社会活動で生かすことは出来ると思う。この経験を無駄にしないよう、これからも勉強を続けていきたい。

■**今後、行いたいこと**

今回の活動を通して、海外に行って、他国の若者の考え方をもっと知りたいと思った。今、私は英語と中国語を学んでおり、言語だけでなく文化や若者の考え方などを知るために、研修に参加することや留学を行いたいと考えている。また、サークルのボランティア活動だけでなく、興味を持った活動にも積極的に参加したい。

■**氏名：**森田　梨里佳
■**所属団体：**島根県立大学吹奏楽部
■**活動内容：**石見地域の小中学生への演奏指導や、ろう学校の生徒と音楽を通じた交流活動を行っている

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

私は、若者にこそ偏見にとらわれず、柔軟に社会の物事を見る力と、社会を変えるために行動を起こすエネルギーがあると感じた。そして、これからの時代を担っていく若者が、当事者意識を持ち社会問題に取り組んでいかなければ、より良い未来は築かれないと考えた。

そこで、まず私たち自身が、社会に目を向ける機会づくりや社会参画しやすい環境づくりを行うべきだ。ありのままの現状を学ぶことで問題意識が自然と拡大し、より多くの若者の参画意欲を高めることができる。たとえ一人の力は僅かであっても、多くの若者が自ら考え行動するようになれば、社会に変化をもたらすことができる力へと変わる。重要なことは、勇気をもって行動し続ける人間に自らがなろうという意志を個々人が持つことだ。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

ドイツで16歳の少女から講義を受けた際、彼女は環境というとても大きな問題に正面から取り組んでいた。これに対し、自分は自ら進んで課題に向かう意識が不足していたと強く実感した。また、彼女だけでなく、ディスカッションを共に繰り返したドイツ団のメンバーも、それぞれが困難な壁に積極的に向かっていた。実際に交流を行ったことで、彼らの存在をより身近に感じ、社会のために尽力する姿勢は自らの熱意につながった。

まず、私はその熱意をドイツでの研修で興味を持ちはじめた環境問題の情報収集に充てた。講義では、人類共通の課題であるはずの「環境」だが、様々な活動やシステムについては新しく知ることばかりで、自分の無知に気づかされた。このような重要な問題であっても、自分から情報を集めないと、知ることのない問題や運動は数多く存在するのだと考えた。しかし、情報を集めようとインターネット検索をしても、思ったようなデータはなかなか見つけられないことを実感した。また、今回のように活発な議論を再び交わそうと思っても、地理的・人員的要素から容易にできないことを思い知った。

だが、議論は改めて場を作らなくても、日常的に行えるはずだ。我々は社会問題について討論することに、無意識下でハードルを設けているのではないだろうか。政治においては、特に顕著で家族や友人間でほとんど話題に上らず、ここにドイツとの大きな差があると感じた。衝突を恐れ、目をそらすのではなく、真剣に身近な人同士から対話を始めることが、我々に求められていることだと考え、日常的に社会問題の話題を取り上げている。口に出すことで考えもまとまり、社会問題に対する意識を身の回りから少しずつ向上することができた。

また、私は自分の社会活動が理解されないことを忌避し、今まであまり周囲へ広めようとはしてこなかった。しかし、ドイツで出会った人々は、自分の活動を自己完結せず、周囲に広げていくことに積極的であった。その考えの源には、社会の隙間を自分達が埋めていくべきという意識があるのではないだろうか。たった一人の力でも、その助けを必要とする人は数多く存在することを自覚し、活動自体に誇りを持ち、さらなる支援者を募っている。私は「行動しない限りは、絶対に何も変わらない」という精神を学び、最初から諦めるのではなく、まず理解者を増やす試みをするべきであると考えが変化した。その結果、市民と大学生による新たな音楽交流の会を作ることができ、大学から地域社会への架け橋となることに成功した。

社会全体の考え方を変化させることは容易ではないが、ドイツで身に着けた積極的に行動に変える意識は、確実に私の考えの中に生きており、周囲に波及させたいと考えている。

■**今後、行いたいこと**

自分には課題に対する知識が不足していると実感した。学習成果発表においても、社会参画への第一歩は、「知る」ことだと結論づけたため、積極的に講演などに参加し知識をつけていきたい。また、居住地である島根県内にとどまらず、日本全国の若者による社会活動の情報収集を行う。特に帰国後から興味を抱いている越境環境問題を中心に知見を広め、過剰包装の商品を購入しないなど、自分にできることから始めたい。

■**氏名：**山本　響希
■**所属団体：**ICO,松山市消防団音楽隊
■**活動内容：**留学生と交流するイベント月 1 回実施して日本人学生と留学生の交流を図る ICO と音楽隊として松山市で演奏する

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

政治に対する意識、ボランティアのバリエーションや規模に対する違いが多いと感じた。
日本では、政治がどう働くかについて習うが、政治参画の仕方については習わない。その為、社会で感じた問題点を見つけてもそれをどう行動して、周りの人に呼びかけ、解決するのかが具体的にわからず実行に踏み切れない。ドイツでは、家族で積極的に政治の議論を交わす習慣があり、学校でも政治に対して、自分の考えを持つ授業内容で政治が生活により密着していた。さらにボランティアでは、いくつも海外に支部のある団体があったりや、自殺防止、環境保護、消防団など幅広い活動をしており、自分たちの生活で足りないと思った物をボランティアで補っていると感じられた。今、住んでいる地域で何が足りないのか知ろうとし、自分たちでは何が出来るかを考え、小さいことでも行動することが大切である。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

日本団と比べ、ドイツ団は自国の政治、歴史、社会参画への知識が遥にあり、自分の考えを持って積極的に発言していた。今まで無関心であったため、意見が言えず日本人として悔しい思いをした。「Friday for future」のように毎週デモを行うなど、政治に日頃から関わっていることあるが、その文化のない私たちが何もしないでいい問題では無いと感じた。いきなりデモのような行動に移す必要はないと考え、まずは少しずつ自分の地域の政策について、どのような意見があるのか調べてみた。愛媛らしい景観を残しつつ、学校が密集している学生都市でもあるため、ヘルメット着用義務化、道路整備や交通の取り締まりをしている。観光都市としての文化を壊さずに、より暮らしやすいように法整備がなされていると感じた。しかし、昔ながらの環境を維持するあまり若者のトレンドを取り入れていないように感じた。より身近な所から始めると何が足りていないのかよく理解できた。このような第 1 歩を踏み進めていくと行動に表れると信じて続けていこうと思う。

さらに、ドイツで政治、歴史、環境などにおいて、市民はどういう意見を持っているのかを学び、国際交流で積極的にその国での政治の関心などを聞くようになった。日韓の政治問題は、双方に非があり、韓国側も解決を望んでいると聞いたことからも市民と政府の意見ではだいぶ差異があることが分かった。今まで文化の違いに重きを置いた国際交流も、政治への関心、教育方法、地域との関わり方など話したいことの幅が広がった。以前は、交際交流において、本人を知ることが大切だと考えており、政治の内容には興味がなかった。しかし、無関心になっていた政治もどのように市民が参画するかをドイツで学び、社会問題についてどう考えているかを聞くことで、多角的に国を捉えられることを知った。

また、近日中に全国の様々なボランティア団体が集まり、教授の講義を聞き、学生セッションを行う「ぴあのわ」を開くこととなった。積極的に新しい活動を取り入れることで、より高い支援ができると考え、自分たちの団体に、今、何が問題であり、不足していることについて話し合いを行った。そこで、ドイツのボランティア団体は、様々なアイスブレイクの方法や活動の伝え方を持っており、そのような手法を取り入れたいと考えた。

ドイツでの最も良かった点は、様々な活動を通して視野が広がり、自分たちの活動の幅が広がったことである。色んな団体と交流することがここまで自分にプラスになると私は知らなかった。今後は、ドイツで学んだことを活かして支援を寄り良いものにしたい。

■**今後、行いたいこと**

「Study abroad fair」に参加して、愛媛大学の学生に海外研修に参加することで、価値観が変わり、成長できることを知ってもらいたい。また、NCO という全国の国際交流団体が集まる研修と全国の大学ボランティア団体の研修を実施するため、ドイツでの学びを日本に合わせるために積極的に議論を深めたい。さらに 10 月頃には、大学内のボランティア団体の研修があるため、そこで挙げられた合同イベント開催を実施して活動の幅を広げていきたいと考えている。

■**氏名：**吉岡　あずみ
■**所属団体：**学生団体 CAST'S
■**活動内容：**“人とのを繋がり”をテーマとし、学内外問わずイベントの企画・運営を行う。また、地域のイベントに参加

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

まず、日本では社会に“参加”することと、“参画”することに関して違いを認識していない人が多くいるのではないだろうか。それに対して、ドイツでは社会に対して自分にはどのようなことが出来るかなど、自分の行動を通して、社会貢献をしたいという意識を持つ人が多いと感じた。社会の一員として、社会に加わるだけでなく、ボランティアや政治的アクションを行うことによって“参画”していく姿勢など、日本がドイツに学ぶことも多く、日本の民主主義について考えさせられることが多かった。今回、ドイツ団との交流の中で印象に残った言葉がある。それは「投票率が半分にも満たない国が民主主義といえるのか」ということだ。ドイツ団の団員から言われた言葉が、その国に生きることに関しての責任や自覚、また、次世代を生きる子供たちに対して、私たちが何を残せるかなど、未来に対する意識の強さを反映しているように感じた。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

私がこのプログラムに参加できたのは、ボランティアに参加しようと思う環境が整っていたからであろう。学びたいと思っていても、機会が与えられない人、様々な問題などでチャレンジできない人などにも、私のこの素晴らしい経験を伝えたいと考えた。そこで、学校の友人や地域活動でお世話になっている方にもドイツでの学びを伝えるようにしている。私は今回の研修で知識不足による移民・難民に対する偏った考え、環境問題に関する意識、政治参画するうえでの社会の支援体制など多くの違いを肌で感じる事が出来た。特に考えさせられたのは移民・難民に対して、日本人が抱えるステレオタイプだ。これは移民・難民だけに限らず、留学生や観光客に対しても言えると思う。

また、大学内で「日独学生青年リーダー交流派遣事業　活動報告会」と題して講演会を行った。報告会では、参加に至った経緯や印象に残ったことなど、今回の派遣テーマである「若者の政治参画」などについて自分の意見を発表した。報告会の最後に、あなたの考える「社会参画するうえでのリーダーシップ」とはという質問について、私は以下のように考えを述べた。

「まず、皆さんは“社会参加”と“社会参画”の違いを理解できていますか？社会参加とは、その社会に属すること、社会参画とは、その社会をより良いものにするために自らも積極的に考え行動することを指します。私が考える社会参画とは、日常の当たり前の裏に隠れた不平等に少しでも目を配ることだと考えます。例えば日本のコンビニでは沢山の外国人就労者が働いています。現在の世界共通語は英語ですが、日本で英語を話すことが出来れば日本で職に就くことが出来るでしょうか。移民や難民の方が安定した暮らしを手に入れるために職に就くことは重要な課題となってくると思いますが、日本では、その前段階で言語の壁が立ちはだかります。では、そのような問題から職に就くことができない人たちのために、どのような取り組みが行われているでしょうか。どのような支援が出来るでしょうか。このように我々が当たり前に享受してきた日常に少しだけ疑問を持つことが社会参画するうえでのリーダーシップを考える上で大切になってくると考えます。」

私の考えはまだ未成熟ではあるが、ドイツでの経験が社会参画する上での足掛かりとなったのは間違いないだろう。この経験から、自分の知らない世界に一歩足を踏み出すことで沢山の学びがあると改めて感じた。帰国後に参加した NPO 法人カタリバによる「益田版　カタリ場」では、それらの経験を通じて自分の得たことや考えたことを高校生に向けて発表する機会があった。社会のことに少しでも関心を持ち、若いうちから積極的に行動していくことが、より人生を豊かにするということが少しでも彼らに伝わればいいと思う。

■**今後、行いたいこと**

今後、フィールドに出て活動することの面白さを沢山の人に伝えたい。活動から得ることはさまざまだが、我々の生きる社会に対して、少しでも興味を持つ人が増えてほしいと強く思う。同じ志を持った仲間を増やすことで少しでも現状を打破できれば、今後の日本はより面白みのあるものになると思う。

■**氏名：**義見　祐野
■**所属団体：**都留文科大学　災害ボランティアサークル「VS」
■**活動内容：**東日本大震災、西日本豪雨災害の現地に赴いての災害復興支援活動

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

ドイツで最も興味深かったことは、ドイツ国民が政治に対して、とても積極的であるという点だ。日本とは異なり、多くの若者が政治について意見を持ち、それをフライデーズ・フォー・フューチャーといったデモ活動として、周りに発信していた。その背景には、ナチス・ドイツ時代のような政治を繰り返さないという固い意志を国全体で持っていることがあるだろう。また、そういった積極的な政治参画を実現する理由として、それぞれの判断力と市民性を育て上げる政治教育の存在が大きいと感じた。ドレスデン工科大学政治学研究所で講義を受けた際に、政治を身近なものに例え、ゲームに組み入れ、生徒自身に考えさせることに重きを置く政治教育があることを知った。私自身そのような政治教育は受けたことがないため非常に印象深かった。このような教育の中で多種多様な考えを持つ若者が生まれ、社会に対して行動を起こす若者が育てられるのだろう。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

この事業での経験を生かす機会がドイツ帰国からほどなくして訪れた。2019年10月、関東地方、東北地方を中心に襲った台風19号の災害復興支援である。災害発生後、所属する団体「VS」に呼びかけ、メンバーを招集し、自分をリーダーとして被災現場に向かうボランティアチームを結成した。

私自身それまでリーダーとして災害復興支援をしたことはなく、いつもボランティアを立案、実施する人が他におり、その活動チームの一員として参加するだけであった。実際どのように被災地でボランティアを求める人とコンタクトをとるのか、事前準備、事後報告をどのように進めるのか、いつか自分自身で行い、学ぶ必要があると考えていたが、周囲を引っ張りリーダーとして動き出すには不安があり、躊躇っていた。しかし、今回のドイツでの研修を通し、私は自主的にリーダーとして動くという選択をできるようになった。それは、ドイツで過ごした二週間の中で出会った様々な若者たち、あるいは行動を共にした日本団のメンバーの影響である。ドイツと日本それぞれの若者たちの社会参画の形は本当に様々であったが、一つの共通点があった。それは、自分たちのやりたいこと、やるべきことをはっきりと明確にし、果敢に自分から活動しているという点であった。そこに不安や躊躇いは感じられず、自分たちの活動に誇りを感じているように思えた。ドイツでお話しした方の中に、同年代の人が学校に通う中で学生にはならず、政治に関わるデモ活動等を行っている方がいた。彼女は、気候変動対策についてのデモ活動に参加し、その話の中で非常に印象的なことを言っていた。「学校で勉強したって、気候変動で世界は終わってしまえば、元も子もない」というものだ。学校に行くものといった世間一般的な概念にとらわれず、自身の考えに基づいて、自分の正しいと考える行動をする。これこそが社会参画におけるリーダーの本質ではないだろうか。

交流事業を終え、このような学びを得た私は、実際に自分も行動を起こそうと考え、災害ボランティアチーム結成に至った。全く不安がないわけではないが、それよりもむしろ自分の手で新しい扉を押し開ける充実感と高揚感の方が大きかった。誰かがしているからではなく、自分がそうしたいから、私は災害復興ボランティアという社会参画を今後も続けていく。

■**今後、行いたいこと**

今回のような大規模台風に加え、地震、豪雨、津波と国内における災害の発生は、年々増加している。その中で、私たち若者の活躍する場面は多い。今後は、自分自身が率先してボランティアチームを牽引し、災害発生からより早く、より的確に支援活動を行うようにしたい。また、自分の周囲に対しても、積極的にボランティア活動に参加するよう呼びかけもしたいと考える。

■**氏名：**渡辺　夏海
■**所属団体：**日本遺産呉を外国人にＰＲするガイドになろう。
■**活動内容：**地元である呉の観光地を、外国人観光客を対象に英語で案内する。

■**ドイツで学習したこと**

「若者の社会参画」について

ドイツで学んだことで一番印象に残ったのは、環境問題に対しての考え方だ。ドイツでは、環境問題に対して、若者が中心となって取り組んでいた。ドイツ団との合宿でも感じたが、ドイツの方は、一人ひとりが環境問題に対して、それぞれの考えや意識を持っていた。これまで、私自身や私の周りではあまり環境問題について話していない。環境が多くの問題を抱えている現状を知りながら、どこか他人事に感じている。しかし、ドイツの若者は、当たり前のように環境について考え行動している。Friday for future はまさにその代表といえるだろう。私は、日本とドイツの意識の差に焦りを感じた。日本で生活をしていたままでは、例え、ニュースで世界的な環境に対する活動などを知ったとしても他人事で終わってのではないだろうか。しかし、今回の事業で実際に活動している若者の話を聞くことで、環境について真剣に考える機会を得ることができた。

■**ドイツでの学習をどのように生かしたか**

まず、私はドイツで学習して一番痛感したことは、知識不足である。ドイツ派遣前に、日本の歴史やボランティアなどについて事前学習を行ったが、ドイツ団とのディスカッションを通して、事前学習の内容だけでは知識が不足していると感じた。ドイツでは、政治などに対する意識が高く、私も帰国後は意識的にニュースを見るようにしている。また、ドイツでは友人同士で政治について話をする機会が多くあり、私も帰国後は友人にその日のニュースを話題にすることを行った。以外にも話は盛り上がり、これまで政治を話題としなかったのは、お互いに政治に対する興味がないという思い込みであり、偏見でもあろう。これ自体、大したことではないかもしれないが、私には大きな一歩のように感じた。私は、この出来事をきっかけに友人にドイツで学んだ環境問題の取り組みについて話をすることができた。また、同様に話をした家族も興味を持ち、議論することができた。

帰国してからの短い期間では、大きな活動をできていないが、すぐに実践したこともある。買い物時に袋を断ることだ。これまで、コンビニなどで無料のレジ袋は断ることなくレジ袋に入れてもらっており、振り返るとレジ袋が必要でない時でも断ることなく袋に入れてもらっていた。そこで、私は意識的にレジ袋を断るようにしている。聞かれた時だけでなく自ら必要ない時は必要ないと申告している。そこで気づいたことは、レジ袋は断っても困らないことということだ。むしろ、荷物がすっきりして自分にメリットがあるのではないだろうか。自分に対するメリットを見つけることができれば、長期的に続けることができるだろう。実際に行動しなければ、メリットにも気づくことができなかっただろう。日常生活の中の小さな変化ではあるが、私の価値観を少し変えてくれた。試すことで新た発見があることを学んだ。

このように今回の事業は、私の価値観に大きな影響を与えてくれた。そして新しいことに興味を持つことができた。私は、特に環境問題について興味を持つことができた。今まで環境問題について、深く考えたことはなかった。しかし、自ら環境問題について調べるとともに地元で実施される環境に関するボランティアやイベントなどについても調べている。先日参加したボランティア活動では、まず環境問題についてクイズを行い、知識を深めた後に清掃活動を行った。これまで活動に参加しても、自ら調べて活動に参加することはなかった。今回、自ら行動できたことは大きな一歩である。

■**今後、行いたいこと**

今回の事業で一番感じたことは、自分事と捉えていない人が日本には多いことだ。自分自身の行動が社会と直結することを自覚すべきだ。そのため、私はこの考えを広げる活動をしたい。私の学校には、学生自ら団体を作り活動できる授業がある。これを生かし、学校でこの活動を実施したい。そのためには、まず周りの同じ考えの仲間を探すことから取り組みたい。

7．成果と課題（団長　山田　力也）

（１）成果

本事業（派遣）の今回の成果については、日本団メンバーの報告書から見て取れる。

先ずは、研修テーマの「若者の社会参画」について、中には、自分なりの定義を示した団員もいるが、一様に現時点で自分たちが日頃から継続的に取り組んでいるボランティア活動そのものが社会参画の１つの形であり、決して難しいことや堅苦しいことではないことに気づきを得たようである。しかし、ドイツ団員たちが社会問題を身近なものとして捉え、自ら主体的に問題に対して行動を起こしていることや、自分の信念に従って社会に働きかけている印象を受けたことにより、日本団員としても日常のボランティア活動を継続するだけではなく、今以上に社会に関心を抱き、社会問題に対して目を背けず自分事として捉える（当事者）意識を持つことが必要であること。そのためには、それらの事象について「知る（調べる）」ことから始め、社会をより良いものにするために積極的に考え、行動することが重要であることなどが述べられている。

さらには、日本ではボランティア活動に対する理解や反応が冷ややかである現状や、ドイツに比べ若者の社会参画活動に対するサポート制度が整っていないことを認めつつも、「勇気をもって行動し続ける人間に自らがなろうという意思を個々人が持つこと」、「最初から諦めるのではなく、まず理解者を増やす試みをするべき」、そして「若者が社会に目を向ける機会づくりや社会参画しやすい環境づくりを行うべきだ」との記述が確認できたことは大きな成果であろう。

次に、「政治、選挙、移民、難民」などが報告書内で散見されるキーワードとして挙げられるが、その中でも最も多く見られるものは「環境」である。帰国後に無料レジ袋の受け取りを断り、エコバッグをはじめマイカップ、マイボトルを使用するなど、多くの団員が環境を意識した行動を始めている。また、「環境」を学ぶための留学や有機農園でのファームステイをするため、来年度からドイツ再訪を予定している団員がいる。前者は現在の専攻を変更しての学びになるとのこと。

2018 年の夏、当時 15 歳だったスウェーデン人のグレタ・トゥーンベリさんが地球温暖化対策を求めて始めたスクール・ストライキ（後の「Fridays For Future」）が、世界各国の若者の共感を呼んだのは周知の事実である。ドイツ研修も終盤の 9 月 20 日金曜日、世界規模の運動に合わせ滞在地のドレスデンでもデモ活動が実施された。当日の朝、同地活動のリーダー役を担うザラさん（16 歳）とディスカッションする機会を設定していただき、彼女の活動に対する意識や発言力、そして行動力を目の当たりにしたことは、団員たちの帰国後の行動に大きく影響したことは間違いない。

上述したドイツ再訪問に限らず、アジアや途上国などの現状に関心を持つ団員もおり、本事業の趣旨でもある「高い国際感覚を備えた青少年の育成」が達成される萌芽とも取れよう。

その他、各団員が発表会や報告会などを開催し、それぞれの地元で多くの仲間や関係者を対象に研修での学びや気づきを伝えている様子が伺える。その反響と、自分自身の変化への気づきに関する記述も見られる。また、それぞれの拠点となるボランティア活動に今回の研修の成果を反映するべく、何かしらの変化を仕掛けてみたり、まったく新しい活動

や行動を起こしている団員もいるようである。これら全てが上手く進まずとも、失敗を繰り返しつつ着実に一歩を踏み出し、いずれは大きな飛躍へ繋がるものになって欲しいと願うばかりである。今回の本当の成果が長期的に表出してくることを期待したい。

（２）課題

上記で述べた成果は、本事業が長年の実績を基に緻密に計画されたプログラムで構成されているためである。派遣と受け入れを担う両国担当機関（者）による意図（本事業に対する思い）が参加した若者たちにも十分に伝わり、慣れない環境に置かれても集中して研修に臨むことができている様子であった。ドイツ滞在に関しても何不自由なく安心して充実した日々を過ごすことができた。

全体のプログラムを振り返り特筆する点としては、滞在地での訪問先に関して、団員メンバーが実際に活動する団体への訪問はその時だけではなく、その後のディスカッションを円滑なものにする点からも非常に有効であると感じた。また、過去の団員が、ファシリテーターとして活躍する姿は、帰国後の１つのロールモデルとして現役団員への良い刺激になっていると思われる。だからこそ、日本団もドイツ団と同様に、団長という立場に過去の団員が参加する仕組みが導入できれば、本事業の理想形により近づくのではないかと感じた。

受 入 事 業 報 告

１．参加者名簿

	氏　名	職業・教育課程 活　動　団　体
団長	シュテファン・ブロイヤー Stefan　BREUER	研究・実習助手（大学研究所勤務） ドレスデンに民主主義をモットーとする小学校～高等学校を新設するためのイニシアチブ
1	ティル・グルントマン Till　GRUNDMANN	保健・看護師 [U２５]ベルリン２５歳未満オンライン自殺予防相談（ベルリン大司教管区カリタス連盟）
2	パウラ・ハーザ Paula　HASER	６月高校卒業（２０年に法学部に進学予定） 聖ゲオルギオス・ドイツカトリックスカウト機構、ミュンスターリッターグループ
3	ヴァネッサ・ヘーン Vanessa　HOEN	コミュニケーション・コンサルタント（大手広告代理店勤務） インゴルシュタット市青少年連合
4	デュエト＝ニー＝メギー・レム（メックス） Tuyết-Nhi Meggy LÂM（Max）	大学生（イベントマネジメント専攻） 登記社団異文化交流エイ・エフ・エス（AFS）
5	マクワン・モハマド Makwan　MOHAMMAD	大学生（国際マネジメント専攻） エンアクトゥス・マクデブルク大学リージョナルグループ
6	マイク・ミュラー Mike　MÜLLER	会計監査・税務相談の助手（会計事務所勤務） オッテンドルフ・オクリラ消防団
7	ヴィアジニア・オッター Virginia　OTTER	６月高校卒業（２０年４月に教職課程に進学予定） インゴルシュタット市*青少年連合
8	アンナ＝マリア・ピール Anna-Maria　PIEL	高校生 ヴォルムスヴォネガウ新教青年団
9	ハンナ・ライヒ Hannah　REICH	６月高校卒業（１９年１０月より経営学部に進学） 登記社団異文化交流エイ・エフ・エス（AFS）
１０	カイヤ・ライシュ Kaiya　REISCH	大学生（比較宗教学、先コロンブス期アメリカ学、民俗学専攻） ジャーマン・エンジェル・イニシアチブ
１１	レオ・シュプレンゲル Leo　SPRENGEL	大学生（生命情報科学専攻） 登記社団異文化交流エイ・エフ・エス（AFS）、ドイツ連邦技術救援隊
１２	マーヴィン・ター Marvin　THAR	大学生（ヒューマンファクター学専攻）、マスター課程在籍 Berlimpact
１３	ヤスミーン・ウルリヒ Jasmin　ULRICH	大学生（教育学および哲学専攻） ［U２５］ベルリン　２５歳未満オンライン自殺予防相談（ベルリン大司教管区カリタス連盟）
１４	ギード・ヴァイスマン Guido　WEISSMANN	電気電子技術者（行政機関勤務） シェアメン消防団
１５	テレージア・ヴィットマン Theresia　WITTMANN	大学生（心理学専攻） レーゲンスブルク司教区コルピング青年団

２．日程

	日付	場所	時間	プログラム
1	8 月 21 日 （水）	東京	午後	羽田空港到着 オリエンテーション
2	8 月 22 日 （木）	東京	午前 午後	青少年教育振興機構　概要説明 団ミーティング 講義：日本における若者の社会参画 　神奈川大学人間科学部　教授　斎藤　ゆか　氏
3	8 月 23 日 （金）	東京	午前 午後 夜	団ミーティング 合宿セミナー（ドイツ団・日本団） 説明：ＢＯＮＤ～外国人労働者・難民とともに歩む会～ 夕食交流会
4	8 月 24 日 （土）	東京	終日	合宿セミナー、班別ディスカッション 意見交換のテーマ 「日独のボランティアの共通点・相違点とその背景」 「日独の若者の政治参画の共通点、相違点とその背景」
5	8 月 25 日 （日）	東京	午前 午後	合宿セミナー、班別ディスカッション 全体発表（班ごとに発表）
6	8 月 26 日 （月）	東京	終日	自主研修
7	8 月 27 日 （火）	東京	午前 午後	説明：ＮＰＯ法人サンカクシャ 訪問：ＮＰＯ法人ｉＰｌｅｄｇｅ
8	8 月 28 日 （水）	東京 奈良	午前 午後 夜	東京⇒奈良 見学：奈良国立博物館 訪問：奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課 曽爾ボランティアとの交流
9	8 月 29 日 （木）	奈良	終日	訪問：曽爾小中学校
10	8 月 30 日 （金）	奈良	午前 午後	説明：曽爾村地域おこし協力隊 対面式、ホームステイ
11	8 月 31 日 （土）	奈良	終日	ホームステイ
12	9 月 1 日 （日）	奈良	午前 午後	ホームステイ ホストファミリーとの懇親会、団ミーティング
13	9 月 2 日 （月）	奈良 大阪	午前 午後	学習成果発表会 奈良⇒大阪
14	9 月 3 日 （火）	大阪	午前	関西国際空港発

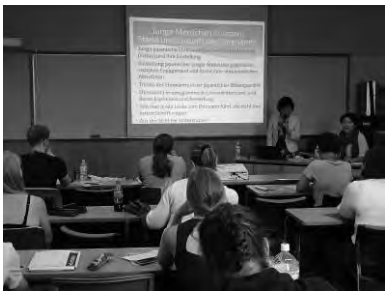
３．ダイジェスト

＜８月２２日（木）＞

○講義「日本における若者の社会参画」

講師：神奈川大学教育学部　教授　斎藤　ゆか　氏

日本における若者の社会参画の現状、日本におけるボランティア活動等について学び質疑応答を行った。



＜８月２３日（金）＞

○説明「ＢＯＮＤ～外国人労働者・難民と共に歩む会～」

説明者：代表　鎌田　和俊　氏

日本における外国人労働者や難民支援について、活動を行っている学生ボランティアの体験談も交えた講義を通して学ぶとともに、質疑応答を行った。

＜８月２３日（金）～２５日（日）＞

○合宿セミナー「夕食交流会」

３日間を共にする日本団とドイツ団の交流会を行った。ドイツ団から出し物があり、楽しい交流の時間となった。

○合宿セミナー「班別ディスカッション」

テーマ①「日独のボランティアの共通点・相違点とその背景」

テーマ②「日独の若者の政治参画の共通点・相違点とその背景」

４グループに分かれ、各班でテーマに沿ったディスカッションを行った。進行役は昨年度の日本団員が行い、ＫＰ（紙芝居プレゼンテーション）法を用いた進行を行うなど団員が意見を出せるような工夫を行っており、活発な意見交換が行われた。

夜には、班別フィールドワークとして、都内のお祭り等を見学した。

○合宿セミナー「全体発表」

班別ディスカッションで協議した内容について、各班で劇や模造紙にまとめ、ドイツ語と日本語を交えて発表を行った。ボランティアや若者の政治参画について、各班とも日独の相違点をまとめた発表であった。

＜８月２７日（火）＞

○説明「ＮＰＯ法人サンカクシャ」

参加者：野澤　智媛　氏

人との繋がりで子ども・若者の孤立を防ぐ活動を行っているサンカクシャの取り組みについて学び、質疑応答を行った。

○訪問「ＮＰＯ法人ｉＰｌｅｄｇｅ」

説明者：代表　羽仁　カンタ　氏

ＮＰＯ法人ｉＰｌｅｄｇｅは、参加型社会を目指すための活動を行っており、活動の１つである社会を「しくみ」と「個人」に捉えて、双方に働きかける「ごみゼロナビゲーション」プロジェクトについて学び、質疑応答を行った。

＜８月２８日（水）＞

○訪問「奈良国立博物館」

博物館におけるボランティア活動についての紹介及びボランティアの役割を知るとともに、実際に博物館の説明を聞きながら、仏像館を見学し、仏教美術の魅力とその背景にある豊かな歴史・文化について学んだ。

○訪問「奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課」

説明者：奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課　大学生塾コーディネーター

松岡　清之氏

「大学生による奈良県南東部の小中学校における学習支援サポート」について、説明を受けた。その後、質疑応答を行った。

＜８月２９日（木）＞

○訪問「曽爾小中学校」

第一部は、ドイツ団と曽爾青少年自然の家の法人ボランティア（以下「曽爾ボランティア」という）が、一緒に考えた遊びを通して、小学生との交流を行い、給食の配膳や食事の様子も見学した。

第二部は、中学校長や生徒代表から、「ふるさと学習」で取り組んでいる獅子舞や、菊づくりなどの地域連携やサマースクールなどの大学との連携について説明を受けた。その後、お互いに質問を出し合ったり、生徒が作成した竹とんぼやガリガリ（竹のプロペラのおもちゃ）で一緒に遊び交流を深めた。

○意見交換「曽爾ボランティア」

曽爾ボランティアによる、自然の家での活動紹介の後、社会貢献活動に参加するきっかけや活動を通して、気づいたことや変容したことなどについてグループでのディスカッションを行った。全体交流では、「勇気を出して活動への一歩を踏み出すことが、自身の成長だけでなく、社会貢献への大きな一歩となり、みんなの笑顔につながる」「多様な活動や考え方を認めることが大切である」などの意見が出された。

＜８月３０日（金）＞

○説明「曽爾村地域おこし協力隊」

曽爾村地域おこし協力隊の並木美佳氏から、曽爾村における漆文化の歴史やその技術の継承についての説明を受け、日本の伝統文化に触れるとともに、漆を通して地域を活性化し伝統的な技法を受け継いでいこうと努力する並木氏の活動について学んだ。その後、箸置きと箸の漆クラフト体験を行った。

○体験「野外炊事」

曽爾ボランティアによる説明と支援のもと、自然の家を利用する学校団体や事業の参加者が実施する野外炊事を体験した。実際に食材を切ったり、火をおこしたりすることで野外活動における安全管理の方法について学ぶ機会となった。

＜８月３０日（金）～９月１日（日）＞

○対面式、ホームステイ、ホストファミリーとの歓送会

内容：ホストファミリーと３日間を過ごすことで、日本の「家庭」に触れ、日本の様々な文化を知る機会となった。また、歓送会では、ホストファミリーからドイツ団への演奏のプレゼントや、ドイツ団の出し物が披露され充実した時間となった。

＜９月２日（月）＞

○学習成果発表会

日本滞在期間中の研修や人との出会いを通して、学んだこと、感じたことを発表した。その中で、ボランティアの育成や政治とボランティアとの関係について、ドイツ団の参加者が感じた日本との相違点や共通点が述べられるとともに、社会貢献活動に取組む姿勢やアプローチの仕方など、多様な考えを認めていくことの大切さなどが述べられた。

４．学習成果発表会

（１）ボランティアについて

①共通点

・ボランティアを行うことで、自己成長につながる。
・ボランティアを行うことが楽しい時間であり、他人の笑顔にも喜びを感じる。
・社会の手助けとなり、ボランティアに参加することで、社会全体が良くなる。
・家族や友人の誘いでボランティアを始めることが多い。
・自身のキャリアや就職のためにボランティアを行う。
・友人や家族からボランティア活動について理解されない。
・ボランティア活動の意味が理解されない。

②相違点

・日本には、大学の授業で「ボランティア理論」という授業がある。
・日本人の中には、大学での授業をきっかけにボランティアを始める学生がいる。
・日本ではボランティア活動を通して、何を達成できるのかなどの自己分析ができていない。
・日本では社会の中でボランティアの立ち位置が曖昧である。
・日本では活発に活動するボランティアの人数が少ない。
・ドイツではボランティアを趣味としている人もおり、理解を得られやすいが、日本では趣味としている人の割合が少なく、理解が得られにくい。

（２）ボランティア養成について

①共通点

・ボランティア養成に力を入れている。

②相違点

・日本ではボランティア養成の際に、実践が多く理論が少ない。
・ドイツでは実際に行うボランティア活動について養成を行うが、日本はボランティアの全般的な説明や理論などを行い、養成している。
・ドイツでは、ユーライカ（青少年の仕事に従事するボランティア従業員向けのドイツ国内で標準化されたＩＤカード）が存在しており、取得することで青年リーダーとなれるが、日本にはユーライカのような証明する制度はない。
・ドイツでは、青年リーダーとなると助成金を受けやすいなどの制度が存在する。

（３）助成金について

①共通点

・財政面で苦労しており、企業などに援助してもらう団体も多い。

②相違点

・ドイツでは、教会からの援助がある。
・日本では、活動を実施するための資金集めを活発に行う必要がある。
・日本では、大きな組織で動くというより個人で活動を行う人が多いため、金銭面やその他活動での苦労が多い。

（４）政治について

①共通点

・民主主義の中で、社会参画が重要だという考え方がある。

・政治の不透明さが原因で、政治に対する距離がある。特に日本は、若者の政治離れが顕著である。

・政党や政治に関する報道を行うメディアに対する不信感が強い。

・政党の方針など、両国ともに自分の目で確認する方が正しい情報を得られる。また、その情報を得る手段がドイツの方が多い。

・学校の授業の中で、政治の仕組みを学ぶ機会がある。

②相違点

・日本は、選挙での投票１票の価値が低いと感じており、それが投票率にも影響していると考えられるが、ドイツでは投票１票の重みと投票効果が感じられている。

・ドイツでは、ユーチューブなどを使用して政党の説明が行われており、若者が選挙に参加しやすいような仕組みがある。

・日本は若者同士で政治の話をする機会は少ないが、ドイツでは常に議論ができるように一人ひとりが考えを持っており、ドイツの方が政治に対してアクティブである。しかしながら、それが政治に対して影響があるかというとその点については疑問である。

・日本では、政治についての授業が座学のみで行われるが、ドイツではオープンディスカッション形式で政治について学ぶ。そのため、ドイツでは自分の意見を持って、積極的に参加する。

（５）まとめ

・日本での学び、新しい文化、出会いをドイツに持ち帰りたい。

・講義「日本における若者の社会参画」において、ボランティアは、自分の環境や社会、そして自分自身を変えることが可能であることを学んだ。

・何かを変える時には勇気が必要である。

・日本のように社会の中での人間同士の在り方や気遣い、優しさをドイツに持ち帰りたい。

・自分自身や仲間を大切にする気持ちを大切にしたい。

・日本は若者と政治の距離を縮めるために、政治に関する授業を一方的に行うのではなく、ディスカッションなどを行い、自分の考えを持つことを行うべきではないか。その取り組みが政治参画にもつながるだろう。

・今回の交流のようにグローバルに絆をつなぐことが重要である。

５．参加者コメント

１）プログラムの内容について

・ボランティアとの交流が多くあり、直接、話を聞けることが良かった。

・ＢＯＮＤの講義が非常に興味深かった。

・斎藤氏の講義で、日本におけるボランティア教育がどのように行われているかを知ることができた。

・日本団とのディスカッションは、テーマを減らし、自主的な議論を行いたい。

２）プログラムの時間配分について

・斎藤氏の講義をもう少し長くしてほしい。

・ＢＯＮＤの学生ボランティア、日本団や曽爾ボランティアとのディスカッションの時間を長く確保してほしい。

３）その他、学びたかった内容について

・日本のホームレス関係のプログラムについて

・日本の防災関係のプログラムについて

・心理的な問題を抱えた人を対象に活動する団体（自殺防止に取り組む団体等）について

４）その他

・プログラムが全体的に興味深かった。

・曽爾プログラムが詰まり過ぎているように感じた。

・団体の訪問を多くしてほしい。

・都市と地方のプログラムの組み合わせが良かった。

・プログラムは多岐で疲労もあったが、２週間の限られた時間の中で多くのことを学ぶことができた。

・講義や訪問先での担当者とのディスカッションの時間を長く取ってほしい。

・合宿セミナーでは、学習成果発表会の発表準備（ディスカッションの内容をまとめて、ポスター作成や発表劇の練習を行う等）に時間を割くよりも、意見交換を行う時間を長く確保してほしい。

６．成果と課題（国際・企画課）

（１）企画

本事業は、ドイツ団が日本でボランティア活動を通して社会参画している若者や団体と交流することで、ボランティアや若者の社会参画について、日独の比較できるようプログラムを構成した。学習成果発表では、ドイツ団に日本での団体訪問やボランティアとして活躍する日本の若者との意見交換を通して、日本の若者に対する提言やドイツに持ち帰りたいものを発表してもらうこととした。

（２）成果

成果として、ドイツ団が訪問先や合宿セミナーでのディスカッションを通して、「ボランティア」、「ボランティア養成」、「助成金」、「政治」について、日本とドイツの共通点・相違点について学べたことである。その中で、ドイツ団が日本に対する提言やドイツに持ち帰りたいものを多く学習成果として発表したことは大きな成果と言えよう。特に、ドイツに持ち帰りたいものとして、「日本人の気遣いや優しさ」を挙げており、ボランティア活動を行う者にとって相手に対する気遣いや優しさは、何よりも重要と言えよう。ディスカッションを通しても、「ボランティア」に対する意識はドイツの方が高いように感じられるが、そのような中でもドイツ団が日本の「気遣いや優しさ」を持ち帰りたい項目として挙げたことは、日本の良さでもあり、今後も忘れてならない精神だと考えられる。

またドイツ団は、日本に対する提言として、若者と政治の関わりについて述べている。ドイツ団は、日本の若者の選挙に対する意識の低さに疑問を感じており、学校の授業などでディスカッションを取り入れるなど、自分の考えを持った上で意見交換を行うことが政治参画につながるのではないかと提案している。自分の意見を持つということは、政治参画だけに限らず、様々な場面において重要であり、日本側としてもドイツ団の提言は、参考にすべき提言であろう。

さらにドイツ団は、学習成果のまとめとして、「グローバルに絆をつなぐことの重要性」を述べており、日独双方の意見交換や交流をきっかけとして、今後も仲間の和が広がることが重要と言えよう。

（３）課題

大きな課題として、訪問先の選定が挙げられる。例年、訪問先の選定には苦労しており、訪問先から内諾をいただいても、施設が狭いことを理由にオリンピックセンターでの説明及びディスカッションを希望されることが多数ある。ドイツ団から現場を見学した上で意見交換したいとの要望があり、訪問先の選定には例年以上に早めに取り組み、訪問した上での、見学や意見交換を行うプログラムを組み立てたる必要がある。

最後に、今回の企画・運営に際し、多くの方に携わっていただいたことで、ドイツ団の有意義な研修を展開することができた。プログラムに協力していただいた全ての方に感謝を申し上げる。

令和元（2019）年度　　文部科学省委託事業
日独学生青年リーダー交流　事業報告書

令和２年１月発行

編集発行
◆
独立行政法人国立青少年教育振興機構　国際・企画課
http://www.niye.go.jp
〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町３－１
TEL　03－6407－7616

本報告書は、文部科学省の青少年国際交流推進事業委託事業として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和元（2019）年度「日独学生青年リーダー交流事業」の成果を取りまとめたものです。
従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。